
3・惨・サンタの子守歌

雨永祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3・惨・サンタの子守歌

【Nコード】

N4277B

【作者名】

雨永祭

【あらすじ】

みたくろすけ

大学生、三田黒裕、あだ名は『サンタ』。そのサンタの元にやって来たのはミニスカサンタ？！しかも自分をサンタにプレゼントしに来た？プレゼントという名の得物が詰まったプレゼント袋を持ち、ミニスカサンタ・サンは今日も行く！自小説『僕と彼女のなんとかんとか』の柳泉市を舞台に繰り広げられるサンタクロスコメディ！只今絶賛修正中！少しずつ直していきます。

ギフト1：あけおめサンタ（前書き）

……また見切り発車しちゃいました。

ともあれ3・惨・サンタの子守歌をお楽しみ下さい。

ギフト1：あけおめサンタ

子供の頃、俺は夢見がちな少年だった。七夕では必ずファンタジーな願い事をしていたし、ネッシーやビックフットは絶対にいると信じていたし、サンタクロースだって当然信じていた。

9歳くらいの頃だったろうか、クリスマスにサンタクロースはいないんだ、と親に言われた。

その衝撃と言ったら無かった。

サンタクロースはいない、それは俺にとって一つの世界の終焉だった。

その年のクリスマス。虚しさを噛み締めながら寝ていた俺は急な寒さに目を覚ました。部屋を見回すと窓が開いていて、そこには小さな人影が。

「だ、誰？」

「私、サンタクロース」

その声は少女のものだった。月の逆光で良く見えなかったけど、髪が月光でキラキラしていた事を覚えている。

「あなたは どうして そんな悲しそうな顔をしてるの？」

少女の言葉に俺は悲しくなってきた。

「だって、サンタクロースがいないから……」

「私はサンタクロースって言ったよね？ 聞いて無かったの？」

「うつ……」

少女が楽しそうに微笑んだような気がした。

少女が突然しゃがみ込み、何かを漁り始めた。

俺は少女が何をしてるか分からずに首を傾げる。

「何してるの？」

少女は漁るのをやめて立ち上がり、俺に何かを差し出した。

「はい、クリスマスプレゼント」

「あ、ありがとう……」

俺は訳が分からず自称サンタクロースの少女からプレゼントを受け取った。

「君の名前は？」

「クロスケ……」

「クロスケ、また来るね」

少女はそう言い残して窓から飛び下りた。慌てて窓から身を乗り出すと空にはトナカイが引っ張るそりに乗った少女。

「ほんとにサンタクロースだったんだ……」

その日から、俺の中でサンタクロースは確かなものになった。終焉を迎えた筈の世界の新たな夜明け。

あの少女はいつ来るんだろう？
サンタクロースの少女に会う事。

それが、俺の夢。

それから10年が経った。

今や俺も19歳の大学1年。結局、あの後一度たりともサントクロースの少女と再会する事は叶わなかった。

兎にも角にも今年も後10秒しかない。テレビの中ではカウントダウンが行われている。

『10！ 9！ 8！』

「はあ、俺も皆と一緒にに行けば良かったかな……」

『4！ 3！ 2！ 1！』

ドガッシャーーンッ！！

「なんだあっ！？」

ガラスが盛大に碎ける音。何かが家に突っ込んできたらしい。

そして、俺はとんでも無い物を見てしまった。

窓を突き破って家に突っ込んで来たのは――

「ト、トナカイ？」

そこに佇んでいたのは窓を突き破ったにも関わらず無傷の立派なトナカイ。

なんでトナカイが突っ込んで来たんだ？
良く見るとトナカイの後ろにはそりがある。

「オメエが三田黒裕か？」
みたくろすけ

ト、トナカイが喋った……。いやいやいや！　いくら俺がファンタジー好きだからっていきなりトナカイが喋るとかはねえって！

「ボヤツとしとらんでさっさと答えるヤアツ！」

「は、はいっ！　そうです！」

「そうならそうとさっさと言わんカイボケエツ！」

ええ〜っ、ヤ、ヤクザ？　このトナカイはヤクザ！？　めっちやコワアー〜ッ！　ってかなんか理不尽！

「お嬢っ、ついに着きましたよ。お嬢っ！　起きてください！」

お嬢？　そりに誰か乗ってるのか？　……そりやそうか。

「ん……んん……ほわぁ？　おはよ、乱次さん」

聞こえてきたのは如何にも寝起きといった感じだがとても綺麗な女性の声。

「寝ぼけてねえで、お嬢の探し人が見つかったんですよ」

ガタンツとそりから誰かが立ち上がる。

……ミ、ミニスカサント？

綺麗と言っより可愛い顔立ちの無愛想な少女。

「……あなたが三田黒裕？」

「え……あ、ああ」

少女が急に近付いて来て――

「うおっ！」

ミニスカサントが俺に抱き付いた。
んあっ！ や、柔らかいものが……っ！ で、デカいぞ！

「い、いきなり何をするんだっ！」

今まで無表情だった少女がニツコリと俺に笑いかけた。
か、可愛い……。スツゲー可愛い……。

「プレゼント」

「はい？」

この子は何を言ってる？

「あなたに私をクリスマスプレゼントしに来ました」

「はあっ！？ なんですと！？」

突然の爆弾発言に俺の思考はオツペケペー。つまりは大混乱。
おいおいおいおいおい、私がプレゼントって一体何処のバカカップル
の台詞だ馬鹿野郎っ！？

ん？ あれ？ 顔が急に近――

チュッ

触れ合った唇と唇。……………何？ 何が起
った？ 一体俺に何が起こったっ？！
ミニスカサントはさらに体を俺に押しつけてパニックを起こして
いる俺に止どめの一言。

「今日から私はあなたの物だよ、よろしくね」

この時、俺の頭の冷静な部分はこう呟いていた。
今はもう正月だからクリスマスプレゼントじゃなくてお年玉だよ
なあ…………と。

ギフト1：あけおめサンタ（後書き）

影響を割と受けやすい性格が小説に現れてるなあ……と思う今日の頃の雨永です。

如何でしたでしょうか？ 面白いと思ってくれたなら幸いです。

きつとこの話もかなり出鱈目な更新速度になると思いますが、どうか飽きずに付き合ってもらえたら嬉しいです。

それでは、評価・批評・感想をよろしくお願いします。

ギフト2：蕎麦食いサンタ

なんとか自分を落ち着け、只今質疑応答中。

まず、ミニスカサンタの少女の名前はサン・T・アクライド・ロースベルラと言っらしい。

以上！

ぶっちゃんけ名前くらいしか分かって無い。

何故かって？ それはな、

「それで、サンちゃん」

「サっちゃんかサンたんって呼んでくれなきゃ嫌」

「……あのね、サンちゃん」

「サっちゃんかサンたんって呼んでくれなきゃ嫌」

と、まあそういう訳です、はい。

つか、サっちゃんなんて恥ずかしくて呼べるかつ！ サンたん

は余計問題外だしよ！ サンちゃんが俺の妥協点だ！

「だからね、サンち……」

「サっちゃんかサンたんって呼んでくれなきゃ嫌。嫌々イヤイヤいやいや嫌々嫌々イヤイヤいやいやイヤ！」

……っ、餓鬼かよこいつは、ぶん殴って……はうあつ！！
ヤバイ、こりゃヤバイ！

あの喋るトナカイが頭を下げて俺を睨みながら後ろ脚に力を込めてる……。

あんな角に刺されたら……ぎいやああああああつ！！

背に腹は代えられないに決まってる！ こんなところで死んでた

まるかぁ!!

「さ、サっちゃん」

「何？」

……表情が全然変わらんから何考えてるか全然わからんが歡喜のオーラは伝わってくるな。

あのトナカイも睨んではいるがひとまず攻撃はしてこんだろう。

「あのさ、『私がクリスマスプレゼント』ってどういう事？」

「言った通りの意味だよ。フツツ力者ですが、これからもよろしく願います。」

………こういう時、俺はどう答えりゃいい？ 取りあえず分かってる事は――

「まさか、押しかけ妻のつもりか？」

「うん、突撃！ お宅の押し掛け幼妻」

わ、訳が分からん……。

「なんだそ……」

ぐぐぐぐぐぐ。

地の底から響いて来るような音。何かと思ったらサっちゃんが腹の辺りを押さえながら迷子の子犬みたいな顔で俺を見つめる。

「ど、どうした？」

「お腹すいた……」

そ、そんなさがるような顔されてもなあ……。仕方無い、か？
あのトナカイが睨んでるしなあ……。

「はあ……。わかったよ、ちょっと待ってて」

余った年越しソバを自分もついでに食べようと思い、二杯作って持つて行くと見知らぬ男とサっちゃんが喋っている。

「サっちゃん、その人誰？」

「おう、そういえば黒の字に自己紹介してなかったな」

一体この男はいつ入って来たんだ？ サっちゃんと知り合いみたいけど……。ってか着流し、角刈り、刀傷。まんまクザじゃねえか、怖いって……。

「くーちゃん、この人はトナカイの都中井乱次さん。みやなかいらんじ私の相棒のトナカイ」

はい？ トナカイ？ この人が？ ってかくーちゃん？

「サっちゃん、何言って……」

「うおいっ！ 黒の字いっ！ テメエツ、お嬢にケチつけんのか、

あぁっ?!」

胸倉を掴まれ思いつ切り揺さぶられる。

「ちよっ、やめ、やめて下さいよっ!」

片目に刀傷を持った男いや、漢に胸倉掴まれて怒鳴られるっていうのは想像以上に怖いな……

「乱次さん、私のくーちゃんいじめないで」

乱次さんはサっちゃんに言われた瞬間に手を離れた。ふいゝ助かった。まあツツコミ所は色々あるけど、言ったら乱次さんに怒鳴られそうだなあ。

「と、取りあえずありがとう、サっちゃん」

「当たり前だよ、だって私はくーちゃんのつ……」

「ストップ! サっちゃん何言ってるのさっ! 俺の妻じゃないだろ!」

「ちえっ」

ちえっ、じゃないよ。まったく、何を言い出すのやら……ん?

「ちくしょうっ! なんで、なんでお嬢がこんな表六玉なんかの妻なんかにっ!」

「ちよっと! 乱次さんっ、そんな妄言信じないでくださいよ!」

「む?」

「うふふっ、乱次さんは相変わらず純粹で可愛いね。流石私のトナカイ」

おうおう、随分な迷言だな。

サっちゃんの台詞に呆れながら乱次さんを見ると、

「お、お嬢……っ、そんなに褒めても何も出ませんぜ」

ら、乱次さーんっ！ なんですか、それはっ！ 顔が真っ赤ですよーっ？！

……あー顔を真っ赤にしてモジモジするヤクザ(?) って……なんか萎えるな……。なんか疲れた。

「はあ……乱次さん」

「なんでい」

「ソバ……食べます？」

「おう、貰っぜ」

テーブルの上に年越しソバを置くと二人共嬉しそうにがつつき始めた。

随分良い食いつぶりだなあ……。気分良くなってくるな。

ズゾゾゾッ！ ダンッ！

「おかわり！」

「おかわり！」

食うの速いな。

「ちょっと待ってて、今持ってくるよ」

「早く〜」

「はいはい」

空の井をお盆に乗せて再び台所に向かう。
しかし、あの二人、家に突っ込んで来てからまだ三十分も経ってないのにすっかり馴染んでるよなあ……。

「くーちゃんはーやーくー」

「お嬢が待つてんだろ！ さっさとしろや！」

「はいはい、今持つて行くよ！」

お盆に井を三杯乗せ二人の待つている居間に運ぶ。
麵から作ったかいがあるってもんだよね。

「あふゝ、満足ゝ」

「はあゝ食った、食った」

「お粗末様でした」

満足そうな二人の顔を見るとそれだけでお腹一杯になりそうだな。

「すごく美味しかった。これならいつでも私の主夫になれるよ」

「おう、黒の字、うまかったぜ」

「ありがと」

主夫は余計だけどね。こういうのも……悪くない、かな？ やっ

ぱり料理は人に食べて貰ってなんぼだよな。

「取りあえず俺は井片付けたら寝るから、風呂は自由に使つていいよ。」

あと、階段を上がってすぐのところにある部屋には布団敷いておくから、サッチャンはそこ使つて。あ、乱次さんはその右隣の部屋を使つて下さい。

俺の部屋は突き当たりにあるんでなんかあつたら起こして」

この時間帯に外に放り出すのもあれだし、乱次さんに殺されたくないしな。

「もう寝るの？」

「そりゃあ、もう時間も時間だしね」

「そつか、じゃあ私も寝る」

「乱次さんは？」

「それなら俺も寝ますかね」

結局全員寝るのか。

サッチャんと乱次さんにそれぞれ割り当てた部屋に布団を敷き、俺と一緒に寝ると駄々を捏ねるサッチャンをなんとか宥めてそれを阻止した。

ほんとにガキかつての……。

それにしても『すごく美味しかった』か。明日は気合いを入れておせち料理でも作るか。

なんだか分からないけどサっちゃんとする事がすごく居心地が良
い。

このまま暮らしてもいいかな？　なんて思ってる自分がある。
やっぱ一人が寂しいんだろうな。

あ、そういえば窓割れたまんまだ……。

ギフト2：蕎麦食いサンタ（後書き）

如何でしたでしょうか？

この3・惨・サンタはひたすらゆるゆるな感じでいきますがよろしくです。

ギフト3：お料理サンタと盲目少女

「……………ここでいんだよな？」
「……………うん。ここがサンタの部屋よ」
「……………ああっ、ついにサンタ様の寝顔が拝めるのですねっ」
「……………うわっ、蓮香^{れんか}がどつかトリップしちゃってるよ」
「……………皆、準備はいいか？ よし、行くぞ、せーのっ」

バンッ！！

「サンタッ！ 明けましておめでとうっ！！ 遊びに来たぜっ！
起きろ……………い」
「ちよつとどうしたのよ、セイ……………へ？」
「何してますの、そんなところに突っ立ってたらサンタ様のね……………
がお、が？」
「ちよつと僕にも見せてよ！」

「おめえら、何してやがる……………」

「……………うわああああああああああっ！！」「……………」

「んあ……………」

な、なんだあ……………身体が重いな……………騒がし……………ん？ 晴……………寺？

眠い頭をなんとか働かせ、床で何故か怯えている晴寺に話し掛けてみる。

「……………ぬぁ……………晴寺、何……………してん……………の？」

「そ、それはこっちのセリフつぶべらぁっ！」

「うっさい……………シネ」

俺の胸辺りから拳が晴寺の顔面にめり込み、晴寺轟沈。

……………なーむ。取りあえず心の中で合掌しといたから安らかに逝けよ。

「……………じゃ、おやすみ、くーくー」

俺がもう一度寝ようと布団に潜ると海が悲鳴のような声を上げた。

「ちよつ、晴寺！ コラ、サンタ！ また寝ないであの人なんとキヤツ！」

「私のくーちゃんに近付くな」

俺の胸辺りから手が伸びて海の喉に突き刺さる。

おお……………今度は地獄突きが見事に決まった……………。

入口には蓮香と太佑が何かしていた。

「太佑っ！」

蓮香が太佑を持ち上げた。

おお……………流石だなぁ……………

「え？ ちよつ、蓮香ちゃん？ やめっ、投げないで！ に、にやあぁっ！！！」

太佑は乱次さんに向かってぶん投げられ、太佑の頭が乱次さんの

腹にめり込んでた。

……いたぞ。

「ぬぐあつ！」

「ふっ、ちよろいですわね」

……しかし、五月蠅いなあ。

布団にくるまろうとすると布団をひっぺがされる。

「起きて下さいましっ！」

「……なんだよ、蓮香……」

ああ、眠い……。

「なんだよじゃありませんっ！ この女は誰ですのっ!？」

……この女？ 誰のこと……だ……？

「くーちゃん、こいつ誰？」

その声に眠気があつという間に吹き飛んだ。

サ、サっちゃん？ なんでサっちゃんが俺のベットにいるっ?!
ってかなんか近いっ！

サっちゃんが俺にピッタリと抱き付いていた。

「お、おいっ！ 何してんだっ！」

「添い寝。くーちゃんは温かいね……。そんなことより、この女は
何？」

「うわっ、なんか機嫌悪いぞ？」

「それはこっちのセリフですわっ！」

あれ？　そういえばサっちゃんが添い寝してるのもそうだけど、
なんで蓮香がいるんだ？

「私と私のくーちゃんのお幸福の眠りを妨げたこと万死に値する……」
「『私のくーちゃん』ですって……サンタ様は私のものよっ！」

「なんでだよ……」。

サっちゃんと蓮香は怒り狂った猫の様に互いを威嚇し始めた。

「ふしゃー……っ！」

「きしゃー……っ！」

……埒があかないし五月蠅い。取りあえず――

「うにゃ」

サっちゃんの後ろ襟を掴んで引き剥がす。

「俺はサっちゃんでも蓮香のものでもないんだから朝から物騒な
ことはやめてくれ」

「あう……ご、ごめんなさいサンタ様」

子犬のように蓮香はシユンとする。

「サっちゃんもわかった？」

「はい」

サっちゃんは面白くなさそうに俺の布団にもぐる。

まあこれで事態は収拾がつい……

辺りには晴寺、海、太佑、乱次さんの屍が……。

全然收拾ついてねえ。大惨事だよ……。面倒くさ。

「あーあれだ、蓮香、お願いがあるんだけど」

「は、はいっ！　なんでしょうっ、サンタ様っ！」

キラキラと目を輝かせて頷く蓮香。何がそんなに嬉しいんだか。

「俺は朝食作ってるから皆起こしておいてくれない？」

「……え、まさかこの二度寝糞女もですか？」

スゲー嫌な顔の蓮香。

そんなにサっちゃんが嫌なのか……なんでだ？　ま、いいか。

「うん、よろしく〜」

さて、朝食作っておせち作らないと。

「〜」

鼻歌を歌いながら餅を焼いているとドタドタという足音が。

「お待ちなさいっ！　この糞女！」

「五月蠅い、メス豚」

女同士だと思つと泣きたくなる罵詈雑言。

何やってんだ、あの二人は。あ、こつち来た。

「くーちゃん、あのメス豚が私をいじめる」

台所に来るなり俺の背中にしがみつくサっちゃん。

やめてくれって言っても聞かなそうな雰囲気だな……。

「なんですってーっ!」

蓮香の顔が悪鬼の様に見える。

こ、怖い……。

「ストップ! 台所で騒がないで!」

「ご、ごめんなさい……」

すぐに謝ってくれた蓮香。うん、うん素直で結構。

「まあ未遂? だからいいけど。それで晴寺達は気が付いた?」

「はい、ところでヤクザみたいなあの殿方とそのクソアマは一体なんなんですか?」

当然の疑問だね。

「朝食の後に話すよ。そうだ、皆にきな粉とイソベ焼きのどっちを食べるか聞いて貰える?」

「はい、今すぐ聞いてまいりますっ!」

「あ、お汁粉食べるかどうかもお願ひね」

「分かりましたわっ!」

蓮香はあつという間にいなくなった。

うーん、早いな、流石は蓮香。よく動いてくれる。

「じー」

サっちゃんが俺を凝視してる。なんか、居心地悪いな。

「サ、サっちゃん？」

「じー」

サっちゃんは視線をまったく離さない。

「なんだよ」

「おぬしもなかなか悪よの〜」

なんだそりゃ？ 悪代官ごっこか？ 訳のわからん……。

「あの女はくーちゃんのパシリなんだね」

「はあ？ 訳の分からない事言うなつての。別に無理な事は言っていないし、蓮香も快くやってくれてるんだし」

「ふっ、まさに恋は盲目って奴だね。馬鹿な女」

サっちゃんはニヤリと馬鹿にした様な笑いを浮かべる。

うわっ、なんだその笑い……。気持ち悪い。

「サント様っ！ 晴寺さんがきな粉二つ、海さんがきな粉とイソベ二つずつ、太佑がイソベ一つ、乱次さんとやらがイソベ三つだそうですわっ。お汁粉は全員食べると言っていました。あ、私はきな粉を一つお願いしますねっ！」

ぬつと現れて頼んでいた用件を矢継ぎ早に報告。
つとに手際の良い子だよな。

「りょーかい」

「私に出来ることでしたら何でも言っして下さいねっ！」

「ありがとう、蓮香」

俺のお礼に蓮香の顔がだらしく緩んだ。
うわっ……。

「はあゝしゝあゝわゝせゝ」

蓮香は小躍りで居間に戻って行く。時たま蓮香が分からなくなる
な……。

プニプニとサっちゃんか俺のほっぺをつついた。

「ねえ、くーちゃんって実は女たらし？」

なんだそりゃ。

「阿呆な事言うな。それで、お前は何か食うんだ？」

「きな粉二つとイソベーっ」

「わかった。向こうで大人しく待ってるよ」

「はいはい」

サっちゃんはご機嫌にスキップで居間に向かう。
取りあえず釘刺しとくか。

「蓮香と喧嘩するんじゃないぞ」

「はい。お餅、もちゝゝくーちゃんの作るうまい餅ゝ」

変な歌を口ずさみながらサっちゃんは行ってしまった。
話ちゃんと聞いてんのかなあ？

そういえば……突き破られた窓ってどうなってたわけ？
今更ながらに思い至る俺だった。

ギフト3：お料理サンタと盲目少女（後書き）

どうでしたか？面白いと思って下さったのなら嬉しいです！

評価・批評・感想待ってます。

ギフト：4 自己紹介サンタと争奪サンタ（前書き）

あとがきにキャラクターの容姿についての補足があります。

それでは本編どうぞ！

ギフト：4 自己紹介サンタと争奪サンタ

「いやぁ〜お汁粉美味かったぜサンタ」

「相変わらず料理が上手ね」

「至上の美味しさでしたわ……」

「美味しかったよ〜」

「流石は私のくーちゃんだね」

「黒の字、オセチはねえのかい？」

「皆感想どうもありがとう。色々突っ込み所があったけど無視してあげる」

みんな餅とお汁粉を食べて満足そうだ。作り甲斐があるってものだね。

「さて、本題だけでも……まずお前ら新年早々、しかも朝っぱらか

「何しに来た？」

「いやなにお前のおせち料理を戴こうと思ってな」

「じゃあ前もって連絡しろよ。おせちは今から作るんだからさ」

「マジかつ?!」

「マジだ」

「嘘だろ? って顔されても困るっつーの。」

「それはどうでもいんだけどその子とその人は誰なの?」

「こいつはサ……」

「私はサン・T・アクライド・ローズベルラ。今日からクーちゃん
の妻になったサンタクロースだよ。こっちは相棒のトナカイで都中
井乱次さん。鼻炎持ち。周りからは『赤鼻の極道トナカイ・人斬り
乱次』って呼ばれてるよ。何故なら刀が大好きだから」

「せ、先手を打たれてしまった……し、視線が痛い……。」

「いいか皆、この子は断じて、断、じ、て! 俺の妻じゃないぞ!」

「そんなこと言われてもなあ、海」

「そうよね、ね、太佑」

「サンタサイテー」

聞く耳持つてねえ……。

「それで、あんたらは？」

乱次さんに尋ねられると蓮香以外が慌てて姿勢を正す。

「あ、はい。俺は晴寺晴寺。はるでうせいじ 名字も名前もまったく同じ字を書くサ
ンタの友人です」

「私は佐原海。さばいみ セイジの彼女でサンタの幼馴染みです」

「僕は大河内太佑。おおこうちたすけ 蓮香の双子の弟です」

「……サンタ様の……妻？ ……この、小娘が……嘘……嘘よ……
私の、私の、私のサンタ様の妻だなんて嘘に決まっていますわっ！」

蓮香がブチキレてる。今にもサっちゃんに飛び掛からんとする蓮
香を晴寺、海、太佑の三人が押さえ、乱次さんが身構え、サっちゃ
んはというと、俺の背中に隠れてる。

……はあ、疲れる。

「とにかく落ち着けっ！ サっちゃんが俺の妻って言っるのはサっち
やんの妄言なんだからね！ あっさり信じないでくれ！」

「はっ！ ……すみません………」

そう言われて静かになる蓮香。晴寺達もほっ、と溜め息をついて
蓮香から離れる。

「よし、じゃあ蓮香も二人に自己紹介してくれ」

「……はい………おおこうちれんか大河内蓮香……太佑の双子の元・兄、現・姉ですわ」

「……へ？」

「なんだって？」

予想外の自己紹介に目が点になるサっちゃんと乱次さん。

ま、普通は驚くよな。俺達もかなり度肝を抜かれたしね。

「まあ自己紹介が終わったところでサっちゃんと乱次さんを除く皆が持つてるだろう疑問だけど、サっちゃんと乱次さんはなんで俺の家にいるのか？ 詳細に教えてくれると俺としても助かるんだけど」

全員サっちゃんと乱次さんを見ている。

「私は、クーちゃん——三田黒裕にクリスマスプレゼントを持ってきたの」

俺と乱次さん以外は訳が分からないといった顔。

まあ、俺もよく分かってないけどね。

「それで終わり」

はい？ 終わり？

「おい、おいサンちゃんって言ったか。さっぱり訳がわからんぞ、だいたいクリスマスプレゼントって時期過ぎてるし」

「はっ、小せえな、出歯亀ヤロー。黙ってる」

「ぐはあっ！」

無表情な美少女のドスの効いた低い声はかなり効いたらしい。

「うつ、うつ……」

「よし、よし」

スゲー哀れだ。海に慰められる姿は涙を誘うよ……。

太佑は怯えながらもサっちゃんに尋ねる。

「あのさ、クリスマスプレゼントって何なの？ いや、差し支えなければ、でいんだけどさ」

「そんなに、聞きたい？」

「う、うん……」

「じゃあ教えてあげる。それはね……」

「そ、それは？」

一同に緊張が走る。ってどうしてみんな息を飲んでるんだよ！

ん？ ……あ

「ちょっと乱次さん、なんであなたも緊張してるんですか！ 事情知ってるでしょ？」

「おっと、つい」

「……乱次さん、意外とお茶目ですね」

「褒めても何もでませんぜ」

「分かってますよ」

サっちゃんは溜めに溜め――

「わ・た・し」

顔は相変わらず無表情。でもどこことなく嬉しそうにそういった。

誰もがポカンと……いや、蓮香の背後からどす黒いオーラが……。

「そんなの駄目ですわっ！ サン・T・アクライド・ローズベルラ！ 私と勝負しなさいっ！」

「なんで？」

いや、ほんと何故？

みんな首をひねって蓮香を見る。

「勝った方がサンタ様のクリスマスプレゼントですわっ！」

「めんど〜い」

「ほ〜う、逃げますの。怖じ気付いたのね、はっ、この負け犬サンタクロース」

おおいつ！　なんでそんな喧嘩腰なんだよ！

プッッ

プッッ？　何の音？

「あーあ、お嬢がキレちまいやしたよ」

「き、キレたらどうなるんですか？」

「ああなっちまう……」

「おいコラ、そのあばずれ女あ……黙って聞いてれば調子に乗りやがって……良い度胸だあっ！　ケツん穴に長ドス突っ込んで中身グチャグチャにしてやっから覚悟しろやっあ！！」

こ、こわあーっ！　うわあ……言い出しっぺの蓮香もキョトンとしてるし、晴寺と海は一緒に抱き合いながら怯えてるし、太佑にいたってはアワ噴いてるし……。

「乱次っ！　プレゼント袋持って来い！」

「こちらに」

何処からともなくサンタクロースにつきものの袋を取り出してサっちゃんに渡す。

「あの、乱次さんあの袋どこから?」

「禁則事項で」

……よし、ツツコムまい。

サっちゃんはプレゼント袋から到底その袋には入らないだろうという長さの長ドスを取り出す。

「この妖刀『山葵醬油』わさびしょうゆの錆にしてくれるっ!」

これを見た蓮香は不敵に笑う。

「くつくつくつ……面白いですわ」

蓮香は何処からともなく立派な拵えの日本刀を取り出す。

「蓮香?」

「はい、なんでしょう?」

「その刀はどこから?」

「禁則事項ですわ」

……さいで。

「なかなかの業物みたいですけど、この銘刀『虎樺慈・梱包済』とらかばじこんぼうずみには敵いませんわっ!」

同時に抜くと互いの刀身が目を引いた。山葵醤油はパツと見は普通だが表面が揺らめき、虎樺慈・梱包済は鮮やかな緋色で表面が揺らめく。

「……ヒレイロカネ緋緋色金の刀」

「……オリハルコンの刀か」

チャキッ

サっちゃんは平星眼、蓮香は正眼に構える。

「お、おいサンタ、なんとかしろ!」

「ら、乱次さん!」

乱次さんは諦めたように首をふってる。

そ、そんな……よし!

「さ、サっちゃん、蓮香」

「なーに?」

「なんでしょう?」

「外でやってくれない?」

「はい」

「分かりましたわ」

ガッシャーーンッ!

二人は同時に頷くと窓を突き破って外にでていった。

「……………」

「……………」

「……………」

なんで窓突き破るのさ…………。

庭で繰り広げられているのは長ドスを振るミニスカサントと日本刀を振り回す元男、現美女の壮絶な戦い。

…………なんかシユールだ。

「あゝ……………よし、これからおせち作るから晴寺、海、手伝ってくれる?」

「……ああ」

「……うん、わかった」

疲れたようにのっそりと立ち上がる二人。

「乱次さん、太佑とあの二人をお願いしますね」

「任せとけ、黒の字。窓も直しとくよ」

「ありがとうございます」

乱次さんに頭を下げて三人で台所に向かう。

どこで話が拗れちゃったかなあ？

そんなことを思いながら刀がぶつかりあう音をBGMにおせちを作り始めた。

ま、サっちゃんも晴寺達も楽しみにしてるんだから腕によりをかけておせち作らないとな。

ギフト：4 自己紹介サンタと争奪サンタ（後書き）

キャラクター紹介その一

主人公：三田黒裕。みたくろすけ 三田だから『サンタ』。

髪の色は黒。髪型は前髪は目に少し掛かっていて後ろ髪を一つに束ねている。目付きが悪い為にいつも笑っているような顔をしている。身長は177センチ

メインヒロイン：サン・T・アクライド・ローズベルラ
髪の色は銀髪。髪型は右側が顎辺りまでであるアシンメトリー。いつも無表情にも眠そうにも見える。碧眼。
身長158センチ

トナカイ：都中井乱次。みやなかいらんじ 決して都中井とは読まない。
髪の色は黒。髪型は角刈り。左目の辺りには刀傷が縦に走っている。男よりも漢が似合っているヤクザっぽい男。
身長184センチ

次回もこの三人についてです。

ギフト5：特産サンタとおせちサンタ（前書き）

あとかきのキャラクター紹介その2はサンタとサンと乱次の家族構成です

では本編どうぞ！

ギフト5：特産サンタとおせちサンタ

「食らえメス豚！ 『山形産米沢牛』！！」

「小癩なっ！ 『仙台銘菓・萩の調べ』！！」

ミニスカサンタの美少女と元男の美女の手には卓球のラケットが。
庭にはもちろん卓球台。

「なんのっ！ 『秋田県産比内地鶏』！！」

「なめるなっ！ 『仙台銘菓・ずんだもち』！！」

なんで卓球してるんだ？ だいたいスマッシュ打つ時のあの叫び
はなんだ？

二人は尚も凄まじいラリーの応酬をする。乱次さんは得点を数え
てる。得点は0対0。

「乱次さん」

「おう、黒の字。おせちが出来たのか？」

「出来たよ。それであれは何？」

「あの小娘なかなかやりやすね、お嬢に匹敵する力量ですよ」

「いや、それは良いですけどなんでまた卓球やってんですか？ そ
れにあの卓球台はどっから持って来たんですかっ！？」

「お嬢のプレゼント袋」

あのタヌキ風猫ロボットのポケットかよ！

「黒の字、ポケットじゃねえガリバーさんの隧道すいどうみたいなものと思っ
てもえたら」

「乱次さん、日本語でトンネルって言えば良いってもんじゃないですよ！あと、なに人の心を聞いちゃってんですか！」

「そこはトナカイの特殊スキルってことで勘弁願いますよ」

「……………」
「そうですか」

「嘘に決まってるでしょう、あっはっはっ」

「もういいです。しっかし――」

[illegible]

……
 続きすぎだよ。
 とにかく止めないとどうにもならないよな。

「さっちゃん、蓮香、そろそろおわ……」

「奥義！ 神戸牛の和風ステーキ！！」

さっちゃんが放つスマッシュがオレンジ色の軌跡を描き蓮香のコートへ。

「なんの！ 美技！ 大間産本マグロのカマ焼き！！！」

さっちゃんの凄まじいスマッシュを見事に打ち返す。

「無駄あ！」

カツ

「オラあ！」

カツ

「無駄無駄あ！」

カツ

「オラオラあ！」

カツ

[illegible]

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオ

ラオラオラオラオラオラオラオラあ！」

……だめだろ、これ。

バンツ！！ コツコツコンコンコン。

卓球台を思い切り叩くと二人の動きが止まる。

「二人共いい加減にしろ」

「ごめんなさい」

「すみませんですわ」

「もうお昼だし、おせちも出来たからそれを『仲良く』片付けたら来てね」

「……………」

「……………」

睨み合っさっちゃんと蓮香。

「返事は？」

「はい」

「……はい」

二人はいそいそと卓球台を片付け始めた。

「サンタ」

「うわいっ！……って太佑いたのか……」

「はじめっからいたよ！ それにしてもサンタはなんか『お母さん』みたいだね」

「馬鹿言っな！ だいたい俺は男だぞ！」

「そんなこと言われても……ねえ、乱次さん」

「ああ、あれは正に母親そのものでしたぜ」

「乱次さんまでやめて下さい！ 乱次さんも太佑も早く食卓の方に来て下さいよ」

「りょーかい」

「俺はお嬢と一緒にいきますよ」

さて、さっさと居間に戻るか。

『いただきまーす!』

みなで正月の特番を見ながらおせちを囲む。

「あ、セイジ、その栗きんとん取って」

「おう、はいよ」

「サンキュ」

晴寺と海は仲良くおせちをつついてる。乱次さんと太佑は――

「あ、乱次さんも絵描くんだ。僕は今油絵を練習中」

「太佑はハイカラだな。俺は絵といっても水彩画と水墨画を描いてな」

「わあっ、すごい! 水彩画は風景?」

「うーん、お嬢が多いな」

趣味が合ったらしく話に華を咲かせている。俺はというと――

「くーちゃん、あーん」

「邪魔ですわっ！ はい、サント様。黒豆ですわ、あーんしてください」

「ダメ、私がくーちゃんに食べさせる」

「私ですわっ！」

目の前でどっちが俺に食べさせるか張り合ってるサっちゃんと蓮香。

「くーちゃん」

「サント様」

サっちゃんと蓮香は睨み合いながら――俺には笑いかけながら――俺の目の前にズイツと黒豆を掴んだ箸を差し出す

『はい、あーん』

楽しそうなのはいいが普通に食わせろ……。

ギフト5：特産サンタとおせちサンタ（後書き）

チキチキ！ キャラクター紹介〜その2〜

サンタの両親はすでに他界。妹が一人いるが訳あって柳泉学園の女子寮に住んでいる。

サンの両親は北欧辺りに住んでるらしい。もちろん両親は共にサンタクロース。シーズンオフの時の仕事についてはサンも知らないらしい。サンは実はかなりのお嬢様だったりする。

乱次さんの妻、息子、娘はトナカイの間で起こった闘争で他界したらしい。左目の刀傷はこの時出来たものだとか。ボロボロになって倒れていた所をサンに助けられ、相棒に。今ではサンの家族も同然になっている。

次は晴寺、海、蓮香、太佑の容姿の紹介です！

ギフト6…宴会サンタと告白サンタ（前書き）

今回はコメディというよりも恋愛の要素が多いです

ギフト6：宴会サンタと告白サンタ

「ムニヤムニヤ……くーちゃあ〜ん……ふにゅ」

「7682番！ 蓮香、脱ぎますですわ！」

「セ・イ・ジツ、にやへへへ〜にやかにいによ〜」

「うつうつ……俺なんか影薄くてさあ……」

「いいか、太佑、人間どうにもねえあるんでえ！ たとえオメエが絵の勉強してたって成功出来るとは限らねえんだよ！ 俺だってチイセエ頃は……」

「は、はあ……」

俺と太佑以外は誰もがグデングデンになってる。なぜこんな事になってるのか、それは数時間前——昼食の辺りまで遡る。

おせちを食べ終わり、片付けを始めようとした時晴寺が俺に頼んできた。

「なあ、サンタ、酒ねえの？」

「無い。俺は酒は飲まないから」

「え〜〜〜〜〜〜」

「えー、じゃない、無いものは無いんだ」

俺はそれだけ言って台所へ向かった。

台所から戻ると全員が俺を見た。何かを懇願する潤んだ瞳で……。

「な、なんだよその目は」

『お酒が飲みたい』

俺以外の全員かよ……。

「ダメだ。そんな目をしても無い物は無いんだ」

『ケチ!』

「ケチじゃない!」

『ブーブー!』

「ブーイングしたってないんだ！」

家には料理酒以外の酒はねえ！

「はっ、マジ使えねえなサンタ」

「黙れ晴寺。ってかお前、俺が下戸だって知ってんだろ」

「あ」

「忘れてんじゃねえ。そんなに飲みたかったら自分で買って来い」

それを聞いた海は突然――

「よし！　じゃあ誰が酒を買いに行くか正月の遊びで決めよう！」

「おい、海、なんでそんなことにな……」

「わーい、おもしろそう」

「でしょでしょ？」

「やっぱり日本酒が飲みたいですわね」

「正月の遊びって何やるの？」

「真剣勝負ですかい？」

「流石は海だなっ！」

「だからなん……」

「うーん、何をやってたらいいかなの？」

「うーちゃん、私、双六持ってるよ」

「ナイスだよ、サンちゃん！」

海がサっちゃんに抱き付く。

「サンタだから」

サっちゃんは嬉しそうにそう言った。

「よしっ！ お酒を買いに行くのは誰だ！ チキチキ！ 大・大・大双六大会……っ！」

『イエーイ！』

……む、無視された……。

俺は人知れず涙を流していた……。

そして、流されるように双六大会が始まったのだった。

双六大会は壮絶だった。晴寺は気絶し、海はテーブル下で震え、太佑は泣き叫び、蓮香は悲鳴をあげ、乱次さんは笑いながら鮫に食われかけ、サっちゃん是人喰い植物と追いかけてっこをし、俺はライندگانをしながら襲ってくるジェイソン、エイリアン、フレディ、ブレデターから逃げていた。

まるでジュオンジのとき双六だった。

お酒は最下位になった乱次さんが買いに行くことになった。

「じゃ、行って来ますよ」

「うん……いつてらっしゃい」

「いつてらっしゃい、ねえくーちゃん、今度は羽子板やるよ」

背中に乗っかってくるサっちゃんはまだまだ元気いっぱいだった。

……どうしてこいつと乱次さんはこんなに元気なんだ？

「ねえ、羽子板やる？」

「やらん」

「じゃあ、一緒にベットで……つぶぶ」

「アホか」

「ちえっ」

「まったく、何考えてんだか。……あ、そういえば乱次さん酒屋の場所分かるかな？」

居間に戻ると誰もが力尽きてる。

「な、なんだったんだあの双六……」

「し、死ぬかと思った……」

「スリリングでしたわ……」

「怖かった、本当に怖かった……」

みんなボロボロだな……。

「……サっちゃん、あの双六はなに？」

「昔パパが映画から帰って来たら『これで子供達の心をゲットだぜっ！』って作った双六」

「お前の父親は何者だよ……」

「サンタクロースに決まってるじゃん」

「……………そうか」

なんか、すんごい疲れたよ。

元気なサっちゃんを適当にあしらいながらダラダラしていると乱次さんが帰って来た。

「なかなか良いのがありやしたよ」

ドンツ、とテーブルの上に置いたのは一升瓶が6本、ビール瓶が12本。

「……………乱次さん、これは？」

「麒麟が12本、熹久水が2本、龍華燐が4本。なかなか良いでしょう？」

「いや、良いものにも……………」

『龍華燐っ！？』

サっちゃんは相変わらず俺に引っ付いたけどほかの四人はテーブル

ルに食いつく。

「お、おい、そんなに興奮することか？」

「おいおい、興奮しないほうがおかしいだろうがよ！」

「そうよ！ 龍華燐を知らないなんてモグリよモグリ！」

「うわあ……これが龍華燐かあ……」

「サント様っ！ これは幻の日本酒と呼ばれていて出るところに出れば三百万は下らないお酒ですわっ！」

……す、す………

「って、何をそんな馬鹿高いお酒買ってきてんですかっ！」

「禁則事項ですよ」

「なっ……そういう問題じゃ……」

「おっしやあーっ！ 呑むぜーっ！」

「うっふふ、まさか龍華燐が呑めるなんてねっ」

「あ、そついえばそろそろ夕飯だね」

「おう、黒の字、なんか作ってくれねえか？」

みんな『よろしく』と肩を叩いてくる。

「俺の意見は……」

「ドンマイ」

早速みんなでテーブルを囲み呑み始めた。

もう開けてるし……。

「はぁ……お前はあの輪に入らないのか？」

「くーちゃんと一緒に呑む」

「そうか、じゃあ夕飯の準備手伝ってくれ」

「うん」

「サントアーーー！ 早く食いもん持って来いっ！」

「うっさい晴寺！ 早く食いたいなら手伝え！」

「いやーだ〜っ！　じゃ、早くな」

それだけ言って晴寺はまた騒ぎ出す。

「つたく、人に押しつけて……」

「くーちゃん、これでいい？」

「ああ、大丈夫だ。じゃあこっち混ぜておいて貰えるか？」

「りょーかい」

居間から聞こえて来る騒ぎを聞きながら二人で料理を作っていく。

うーん……なんか落ち着くな……。そうだ、この際聞いとくか。

「なあ、サっちゃん、結局曖昧になってたけどさ、なんで俺のところに来たんだ？」

「あの時のクリスマスプレゼントは大事にしてる？」

「え……」

「10年振り……くらいになるのかな？」

サっちゃんの銀髪が蛍光灯の光りに煌めく。まるであの時のサンタクロースの少女のように。

「本当……に？」

「もちろん。でも、くーちゃん全然気付いてくれないんだもん」

頬を膨らませる姿にどうしようもなく申し訳無い気分になってしまふ。

「わ、わりい」

「別にあの時は暗くて顔はよく見えなかっただろうからさ。大丈夫、気にして無いからさ」

「そっか……でも、それならなんで今になって来たんだ？　しかも自分をプレゼントって」

サっちゃんはイタズラっぽく笑う。

俺は不覚にもちよつときめいてしまった。

「エへへ、親の決めた許婚が嫌だったってのもあるけど、あの時からずっとくーちゃんが忘れられなくて……」

完全な不意打ちだった。恥ずかしそうに俯き頬を染めるサっちゃん。

やばい、無茶苦茶可愛い……。

「そ、そっか、あ、えーと……あ、あいつら待ってるから早く作って持ってこー！」

「うん……くーちゃん」

サっちゃんが俺にそっと寄り添う。

うわあっ……やべっ、なんか抱き締めたくなってきた……。

俺の手がサっちゃんに触れる瞬間――

「何をイチャイチャしてるのかな？」

「おわっ！」

「ひゃうっ！」

太佑がニヤニヤしながら俺達を見ていた。

「太佑、お前いつから……」

「この包丁の錆にしてやる……」

俺はアイアンクローをかけ、サっちゃんは包丁を首筋に当てる。

「ちょ、二人共、シャレになんないって……だ、誰にも言わないから、ね？ タスケテ」

渋々手を離し、釘を差しておく。できる限りのドスの効いた声で。

「……良いだろう、もし破ったらお前に地獄のフリーパスをプレゼ

ントしてやるからな」

太佑は首がもげんばかりの勢いで何度も頷いた。

「よし、ところでなんか用か？」

「酔っ払いの皆さんがさっさと食い物持ってきて来いって暴れてて……」

よく聞くと居間の方から『飯はまだかぁーっ！』とかドガンバタンパリーンなんて音が聞こえて来る。

「マジで暴れてやがる……よし！ さっちゃん、ペース上げるぞ」

「うん」

「太佑、お前も手伝え。あいつらが家をこれ以上壊さない内に持つていかねえと！」

「わ、わかった！」

三人は台所で慌ただしく料理を作り出す。

料理を持っていき、騒ぎに騒いだ。

夜11時。

「なあ、俺って出番少くないか？ 少ないよな？ なんてなんだよう！」

「にやははははははははははは、気にしない、私も少ないよ」 セイジといっしょ」

「……………だからな、夢だけじゃ何にもナンネンだよ！ わかるか？ 太佑、わかるよな？ でもな、かと言って夢を持つちゃダメなんてコタアーないんだぞ！」

「は、はい、そうですね」

「ああ、どうしてサンタ様はサンタ様なの？ うふふふふふふふふふ、まるで私はジュリエット」

「……………くーちゃん、ふにゃにゃ」

……………酒クセエ、匂いだけで酔っ払いそう。

みんなよく飲めるなと感心してしまう。まあサっちゃんはお猪口2杯で寝ちゃったけどな。

12時を回ると酒豪——っつーよりザルだな——の太佑とシラフ

の俺以外は全員酔い潰れていた。

「乱次さんの相手ご苦労さん。ほれ」

「お、気が利くね」

俺は麦茶、太佑は水を飲みながら一息つく。

「乱次さんの絡み酒はなんか含蓄があつたよ」

「なんかまんまだな、乱次さんの絡み酒って」

「ほんとだよな。サンちゃんは物凄い弱かったけど。しっかし、サ
ンタの下戸も意外だったな」

「そうかあ？」

「うん。ほんとに呑めないの？」

「ああ。昔、親戚の伯父さんに勧められてな、一舐めした後からの
記憶がなくてな、気が付いたら親戚の全員に土下座して『もう酒は
飲まないでくれ』って懇願された」

「……………何したのさ」

「わかんねえが、木のテーブルが小さい木片の山になってた」

「……………うわっ……………」

太佑はブルツと体を震わして俺を見る。

「なんだよ」

「いや、サンタには酒を飲ませないようにしないとなあーって」

「そうしてくれ」

「……くーちゃん」

サっちゃんの声が間近でしたと思った瞬間に――

「うおっ!？」

サっちゃんに抱き締められてしまった。離そうとしてもまったく離れてくれない。

「クスクスクス」

「何笑ってやがる」

「ん、いやあーサンタは愛されてるなあーって思ってさ。それに顔、真っ赤だよ」

「っ!」

マジかつ？

慌てて触ると心なしか顔が熱い気がする。

「ま、サンタとサンちゃんはすごくいい感じだと思っよ。僕は二人の事応援してるよ」

「ウルセエ!」

「いたあっ!」

なんだか妙に恥ずかしくなってきた俺は取りあえず太佑を殴った。

「……くーちゃん、ムニヤムニヤ……好き……」

こうして騒がしかった一日が終わった。

ギフト6：宴会サンタと告白サンタ（後書き）

ニヨキニヨキ！キャラクター紹介（その3）

晴寺晴寺。大学で出来たサンタの友人。とっても良い奴。

身長180センチ

佐原海。いつも若干ナチュラルハイなサンタの幼馴染み。晴寺の恋人。

身長165センチ

大河内蓮香。サンタが好き過ぎて男から女へと性転換したサンタ命の人。太佑の双子の姉（元・兄）。

身長171センチ

大河内太佑。みんなのなだめ役。サンタとは特に仲が良い。サンタの善き相談相手。貧弱。

身長163センチ

評価・批評・感想お待ちしてます。

ギフト7：買い物サンタ（前書き）

今回は『僕と彼女のなんとかかんとか』のキャラが登場します！

ギフト7：買い物サンタ

「俺今から買い物に行つて来るけどなんか必要なものはあるか？」

「なら、タコ糸お願い出来ますかね？」

「りょーかい。サっちゃんは？」

「一緒に行きたい」

「そか、あ、そういえば一応お前と乱次さんの服を買つとかないといけないな」

「あ、俺は大丈夫ですよ。ぬかりはネエですよ」

「あー、うつかり……」

「よし、じゃあそれも買いに行くから早く準備してこい」

「はい」

「人がいっぱい」

「おい、あんまりウロチヨロしてると迷子になるぞ」

「はい」

サっちゃんは俺に近寄ると腕に抱き付いて来る。

「お、おい、歩きずれえから離れろ」

「いや」

いやゝってなんだ、いやゝって！　ってか、胸を押しつけてくるんじゃないねえ！

そんな俺の思いを嘲笑うかのようにサっちゃんはギュッと俺の腕を抱き、上目遣いをしてくる。

や、ヤベエ……一昨日の宴会の時からスゲー意識しちゃってるし……。

「ねえ、最初はどこ行くの？」

落ち着け、落ち着くんだ俺！　……………よしっ！

「行きつけの画材屋と出版社に挨拶しに行くんだよ」

サっちゃんは愛らしく首をひねる。

……………『愛らしく』って俺は何を考えてるんだ……………

「なんで画材屋と出版社？」

「そういえば言ってなかったな、俺は大学に行きながらイラストレーターの仕事してんだよ」

「おお、勤労学生！」

「なんだそりゃ」

「あつ」

サっちゃんは突然俺から離れて駆け出した。

「おい！ どこ行くんだよ！」

慌てて追いかけると雑貨屋らしき店のディスプレイにへばりついていた。

……なんかものスゲエファンシーな店だな。

「まったく、仕方ね……っ!？」

サっちゃんに近付こうとした時、物凄いものを見たような気がした。

なんだあれ。サっちゃんの隣りいるのは……メイド？ いや、まさか。

自分の目がおかしいのだろうと思って目を擦り、もう一度見てみ

る。

や、やっぱりメイドがいる……。

サっちゃんの隣りにはサっちゃんと同じようにディスプレイにへばりついてるメイドがいた。

……ただの噂だと思っていたが実在してたのか……………。

ディスプレイにへばりついてる二人はカワイイ、カワイイと呟きながらディスプレイに展示されている人形——アレは……チ、チュパブラ？——を一心不乱に見ている。

どうしたらいいのかわからずに途方に暮れていると思いつ切り横から押された。

「くーろーちゃん！」

「ぬうおうっ!?!」

ギリギリで踏みこたえ声のした方向を見ると小さい女性がべらぼうに明るい表情で立っていた。

「やーやー！ ひっさしぶりだね〜」

「はあ……確かに久し振りですけど、俺を押す意味あったんですか、
小羽都先輩」

「ある訳ないじゃん」

そうだった、この人はこういう人だったな。

「ちょっと水波音^{みはね}ちゃん！」

今度は気が弱そうな男が駆けて来た。

「あれ、黒裕君。本当に久し振りだね」

「御久し振りで。小羽都先輩の手綱はちゃんと握っててくれないと困りますよ」

「あ、ごめんごめん」

「私は馬じゃ、なついのさ〜」とところでくろちゃんはここで何してたのかな？ あ、別に興味ないから言わなくてもいいよ」

相変わらずテンション馬鹿高いな……疲れるわ……。

「おっと、そうだ。叶井先輩、小羽都先輩、明けましておめでとう
ございます」

「あ、おめでとう」

「あーけおめ〜」

「ところで、二人で何してたんです？」

「おしゃけの買い出し〜！」

「今、楓達が居候してる家でドンチャン騒ぎしててね、それで僕ら

は買い出しに来たんだよ」

「あの人は相変わらずですか？」

「そりゃもう」

「くろちゃんもたまには遊びに行ったら……？」

「ああ、それもそうで……ん」

袖を引つ張られ、その方を向くとサッちゃんが出た。やっと満足したらしい。

「この人は誰？」

ちよっぴり不安そうに尋ねてくるサッちゃん。

まあ変人っちゃあ変人だし、不安になるのも仕方ねえよな。

「くーろーちゃん」 あんまり失礼な事考えてると日由の料理をこ
馳走しちゃうわよ」

「すみませんでした」

俺は自分の命の為に恥も外聞もなく土下座して謝る。

「くーろーちゃん？」

流石にサッちゃんも俺の行動に驚いてる。

仕方無いんだ、サッチャー。この人はやると言ったらどんな事でもやる人なんだから。

俺は氣を取り直して、さっちゃんに二人を紹介した。

「さっちゃん、こつちの女の人こはとみはねが小羽都水波音先輩でこつちの男の人かないひであきがヘタレな叶井秀秋先輩」

「……この人へタレなの？」

「ああ、どうしようもなく」

「黒裕君……僕って、なんなんだ……」

[illegible]

傷口に塩を塗り込む小羽都先輩と打ちのめされて半泣きの叶井先輩。

小羽都先輩、相変わらずえげつねえ……。

「それで、こいつが……」

「サン・T・アクライド・ローズベルだよ」

「なんかサンタさんみたいな名前だね〜」
♪ 365日クリスマス
にならないかなあ〜」

「水波音ちゃん、それは無茶だよ……」ところでメイドを見なかった

かい？」

「メイドって……あそこにへばりついてる人ですか？」

俺がディスプレイにへばりついてるメイドを指さすと小羽都先輩がそのメイドに飛び付いた。

「かーなーたちやーん！」

「にやぐわあっ!？」

メイドは何が起こったのか把握しようとキョロキョロして小羽都先輩を見ると――

「ああっ!　しまった!　買い出しの途中だった……」

そのメイドはバツの悪そうな顔してオロオロしていた。

「叶井先輩、あの獰猛そうな目付きのメイドは知り合いですか？」

「うん、楓達が居候してるとこのメイドさんだよ」

「さっ、秀秋君っ!　彼方ちゃんも確保したしかっえつるよ……」

「あ、うん。それじゃあね、黒裕君」

「はい、それじゃ」

「じゃーねーん」　さあ、彼方ちゃん、帰ったらうれしはずかしドツキドキな罰がまつてるよ……」

「嫌だー！ーっ！ 誰かつ！ タスケテー！ーッ！」

小羽都先輩と叶井先輩は叫ぶメイドを引き摺りながら雑踏の中に消えて行った。

「面白い人達だね」

「まったくだ。……ふう、じゃあさっさと画材屋に行くか」

「うん」

「……？」

「ああ、ここだ」

画材屋の前に着く。看板を見るとそこには『都会と地方の給食はなんとなく格差があるのは気のせいかな？ いやっ！ 気のせいでは無い！ 給食は格差社会を如実に体現してるとは思わなかねっ、君？』と書かれている。みんな略して『給食屋』と呼んでいる。相変

わらず意味不明の看板だな。

「おオオツ！ 素晴らしい看板だ！」

……なんでこいつはこんな意味のわからん看板に感動してるんだ？

「いいから入るぞ」

「うん！」

中に入ると妙ちきりんな店の名前とは打って変わり普通の画材屋。

「あれ？ 意外と普通？」

「まあな、だが品揃えは柳泉市一だぞ」

「おおー」

サっちゃんが感心していると何かに気付いた。

「ねえ、くーちゃん。あそこの棚の上から覗いてる段ボールは何？」

サっちゃんが指さした方を見ると棚の上には段ボールを長方形に切った物が。それには『サンタ君、いらっしやい』とマジックで書かれた丸っこい字が。

「あれは、ここの店長の^{たかしな}高階さんだ」

俺はサっちゃんを連れて段ボールが見えてる方に行くところ――

『その子は彼女かな？ このこの（「ー＋」）ニヤリ』

段ボール製のフリップのような物を持った……………なんだ？ わ、わからねえ。ライオンの頭に胴体は……………や、山羊か？ それで尻尾が蛇い？ どんなキグルミだよ……………。

「キ、キメラ？」

『ミニスカサンのお嬢さん、よく知ってるね〜』

今度はそう書かれた段ボールを出す。

うーん、相変わらずどっからどうやって段ボールを出してるのやら……………。

「しかし、そのキグルミなんか不気味……………」

『そんなことない！ めっさカワイイから！ ねっ！ ミニスカサンのタちゃん！』

「うん、すごくカワイイよ、くーちゃん」

ま、マジかよ……………

キメラのキグルミの目は獰猛そうで爛々と輝き、尻尾の蛇は今にも飛び掛かって来そうだ。

どうみたって可愛くねえぞ？ むしろ今にも食われそうだ……………。

「あ、そうださっちゃん、高階さんに自己紹介しとけ、俺はそこ辺

りで商品みてるからな」

「はい」

確か不足してたのはインクと筆と消しゴムと……そうだ水彩絵具が足りなかったな。

するとサっちゃんの笑い声が聞こえて来た。

「あははっ、うん、だからね、ママがキレちゃって乱次さんとパパをソリに繋いで北極が暗くなるまで引き摺り回しちゃって……うん、うん、しかもその日に限って白夜でね、実際のところは数時間所じやなくてさ、戻って来た乱次さんとパパは三途の川を危うく渡りきつちやうところだったんだ」

……………サっちゃんのママさん「ワーーーーッ!」

俺は人知れず決心した。サっちゃんのママに会ったら絶対に怒ら

せなごしひしごしひし。

ギフト7：買い物サンタ（後書き）

キャラクター紹介っ！〜その4〜

高階さん。『給食屋（略称）』の店長。いつも何かの着ぐるみを着ている。女性らしい。本当の姿を見た事がある人は殆どいないらしい。

ギフト8：着せ替えサンタとフェチサンタ

『それにしてもサンタクロースはやっぱり居たんだね。会って見たいなあ』

「高階さん、私はサンタクロースだからもう会ってるよ」

『あ、そうか、こりゃ一本取られちゃったね』

すっかり仲良くなったこの二人。

俺は選んだ商品を持って二人の居るところに向かうと高階さんが話し掛けて（？）きた。

『あ、それ買うの？』

「そうだけど」

『今、キャンペーン中で商品を買つと福引きができるのさ』

「お、そうなのか。じゃ取りあえず会計よろしく」

高階さんは『はいはい』と段ボールを掲げてからレジを打ち込む。山羊の手で。

なんでそんな手で普通にレジなんか打てんだ？　そういえば今までどうやって段ボール持ってたんだ……？

『2450円になります』

「はい、お代」

『はい、2450円丁度ね。福引きは2回だけど3回にサービスしたげる』

高階さんが福引きの器械を取り出すとサっちゃんが初めて見たのかじつと器械を見ている。

「じー」

「……そんなに興味あるならやるか？」

「うん！」

嬉しそうで何よりだ。あ、そういえば

「景品はどんなのが？」

すぐさまどこからか表を取り出した。

『一等・金玉 大型テレビ

二等・赤玉 ドラム式全自動洗濯機

三等・青玉 ワイヤレスサイクロン掃除機

四等・緑玉 服

五等・オレンジ玉 お茶かジュース

六等・白玉 箱ティッシュ」

……四等の服っていうのはいまいち分からないが、

「サっちゃん、狙うは洗濯機と掃除機だ！」

ちよつと壊れてきてたしな！

「うん！」

サっちゃんは気合いを入れて器械を回す。

「どりゃああああああっ！」

ギュラララララララララララララッ！

壊れんばかりの勢いで回すとカランという音と共に玉が落ちてくる。

落ちて来たのは緑色の玉。

『残念！ 四等でした』

「む」

サっちゃんは悔しそうに顔を歪めてもう一度回す。今度はゆっくりと。

カランコロン

「ううゝまた緑……くーちゃん、最後の一回もやっていい？」

次こそは！ という顔で聞いてくるサっちゃん。俺が返事をする前に回し始めた。

……まあいいけどよ。しかし、段々子守してる気分になってきた……。

カランコロン……

「う、うう……」

崩れ落ちたサっちゃんは拳で悔しそうに床を叩く。

スゲー悔しがりようだな。

「……また緑だったか？」

「……うん」

少し申し訳なさそうなサっちゃん。

なんだ？

『そんな落ち込まなくても大丈夫だよ、四等なんだから。ちょっと待っててね』

キメラ高階さんはスキップしながら店の奥にある家に消えていった。

「くーちゃん、ごめん、洗濯機と掃除機取れなかった……」

こいつはそんなこと気にしてたのかよ。仕方ねえ奴……。

「阿呆だな」

「ぶー、阿呆って酷い！」

「ウルセエ、福引きごときに熱くなり過ぎだって言ってるだよ」

「む」

余計に膨れっ面になるサっちゃん。

うーん、困った……。

すると『おまたせ』と書かれた段ボールを頭に張り付け、手に一杯の洋服を持った高階さんが現れた。

「……それって高階さんの着古しじゃ……」

『そ、そんなことはないさ』

「……字が震えてますよ」

この人、福引きにかこつけて服の処分をしようとしてたんじゃ無いだろうな……。

『そ、その猜疑心に満ちたまなざしは何かなっ、サンタ君』

「高階さん、まさかあの中身、全部緑色の玉、なんて事は無いでしょうね……」

『ま、まま、まさかあゝ、あ、あははは』

「……………サっちゃん、あの器械の中身見て来て」

「……………へっ？ あ、う、うん」

むくれていたサっちゃんは慌てて福引きの器械の中身を確認しに行く。

「逃げたら承知しませんよ」

『……………はい』

人睨みすると弱々しい字で返事をする。

「はああっ！ 緑一色……」

サっちゃんが悲しそうな声を上げた。

『あ、あははははははははは、は、は……………』

俺もサっちゃんも高階さんを睨む。

『ごめんなさい』

高階さんはそう書かれた段ボールを掲げて土下座。そして、すぐに起き上がり新しい段ボールを出した。

『で、でもでも!』

「言い訳ですか……」

「私達を騙した上に言い訳……」

『聞いてくれたっていいじゃない!』

かなり慌てて反論したせいか、かなり汚い字だった。しかも

「『て』が抜けてますよ」

高階さんは驚き、段ボールを確認して慌てて後ろに隠して新しく聞いてくれたっていいじゃない!』と出した。

なんか、間抜けだ……。

「……カワイイ」

……慌てふためくカメラをどう見たらカワイイと思えるんだ?
本当にわっかんねえ。

俺が呆れ、サっちゃんがときめいてる隙にすかさず言い訳を書いた段ボールを突き出す。

『どれもこれも一回しか着てないし、クリーニングにも出してるから新品同様だよ! それに結構値の張る奴もあるんだよ? それを2450円で何着も手に入るんだから喜ばないと! ね? ね? ね?』

ずいといと俺達に迫って段ボールを突き付ける高階さん。その勢いに思わず『はあ……』と言つと、

「うひゃあつ!?!」

「あつ!」

有無を言わす前にサっちゃんを家の中に拉致つていった。

突然の事に呆気にとられた俺は立ち尽くしていると家の奥からぬつと高階さんがお茶とイスを持って出てくる。

イスをカウンターの前に、お茶をカウンターの上に置いて『ちょっと寛いでて』

その後カウンターの中が見えないようについたてを立てられる。

「高階さん、何す……え? ほ、ほんとに?」

……なんだ?

「やる! うん、頑張るよっ!」

何するつもりなんだ? って高階さんはサっちゃんに何吹き込んだっ?

心配になって中を覗こうとしたら『只今着替え中』の段ボールがぬつと出てきた。

「……着替え中?」

取りあえずなす術がないからイスに座り、茶を啜っていると金のふざけたタキシードに身を包んだキメラが現れた。

アホだ……。

『どうっ！？ この服よくないっ！？』

「……………」

『な、何かな、その哀れみの目はっ！？』

取りあえず高階さんの言い分を無視。

「…………で、一体に何するつもりなんですか？」

『第7523941回 給食屋ファッションショー！ イエイ！
ドンドンパフパフ』と書かれた段ボールを掲げる。

「……………」

『あーまたそんな目をして、モデルはサントなんだぞ？ もつと喜べ、せいしょねん！ ではどうぞ』

有無を言わせず始めやがった……。

「つたく」

なんか馬鹿馬鹿しくなってきたてイスに座り、茶を啜るとサッチャーんがおずおずと出てきて――

「ぶっ!?!」

思わず茶を吹き出した。

『汚い!』

「も、もう! 汚いよ、くーちゃん」

「汚いよ、じゃねえ……なんだその格好は!」

「カワイイ?」

スクール水着を着てその上にセーラー服。頭にはタレたイヌミミが。

一言で言うならカワイイ。確かにカワイイ。いや、ほんとにカワイイです。ちょっと俺のツボに入ってるし……。でも、卑猥過ぎだろ……カワイイつつたら俺はまるで変態みたいじゃねえか……。

「そついう問題じゃねえ!」

「えー、カワイイのに……」

残念そつに眩くと高階さんがサっちゃんの肩をポンと叩き、親指でクイツと家の中を差す。

『大丈夫だ。次いこうぜ?』

「うん！」

二人はちゃっちゃと家の中へ行ってしまった。

高階さん何してえんだよ……。

少し待つと準備が出来たらしい。高階さんが出てくる。

『これでサンタ君はサンさんにメロメロのグチヨグチヨのベロンベロンのケチヨンケチヨンにベタ惚れたねっ』

なんだそ………

現れたのはセーラー服を身に纏ったサっちゃん。

クルリと一回転し、首を傾げ、

「どう？ カワイイ？」

げふうっ！

サンタは6000のダメージを受けた！

「……………あ、ああ……………」

ヤバイ、完っ全にツボにハマっちゃった……。だ、抱きつきたい……。堪える、堪えるんだ俺っ！

「やったー♪ 高階さん、次々♪」

ノッてきたのか着替える為に意気揚々と家の中へ。

「ふう〜……ヤバかった……」

「何が？」

「ぬうおわっ!？」

後ろから突然した声に驚き、危うくイスから落ちそうになった。

「なんだよ、そんな驚くこと無いじゃないか」

「太佑……いきなり話かけられたら驚くに決まってるだろうが……」

「そ、そんな睨まないでよ」

その顔は少し引きつってる。

「まったく、お前も面白い物か？」

「うん、筆がちょっとね。ところで何してたの？」

カウンター内のついたてを見て首をひねっている太佑。

「いろいろあってファッションショーもどきをやってた……」

「はあ？」

「だよな、訳わかんねえよな。でもな、さっきさっちゃんがセーラ
ー服着て出てきたんだ……」

どうしよう、思い出ただけでこうムラムラと………はっ！
いかんいかんっ！ 堪えろ、三田黒裕え！

「それはきついね」

俺の嗜好を知ってる太佑は肩を叩き、

「ねえ、まさか襲いかかったりは……」

「するかっ！ ……と言いたところだがまた制服、しかもブレザ
ーとかで来られたらもう………」

太佑は苦笑しながら一歩引いた。

このチビ……知ってるくせに！

「とにかく、もしものは俺を止めてくれ」

「はいはい」

物凄い呆れ顔の太佑。

なんかその顔腹立つが信じてるぞ！

『おまたせにや〜♪ 太佑君いらっしや〜♪ サンタ君と一緒に楽しんでってね〜』

そんな高階さんに続いて現れたのは……

ブレザーに身を包んだ可憐なサっちゃん。

「どうかな、くーちゃん。似合ってる？」

スカートの裾を持ち上げ首を傾げながら可愛らしく聞いてくる。

げばあっ！

渾身の一撃！ サンタは94000のダメージを受けた！

落ち着けっ、堪えろっ、頑張れ！ うおおおおっ！ 俺の理性よ！ 持ち堪えてくれえ！

「ちょっとブカブカなんだけど変じゃないよね？」

下から見上げるように俺を見てくれサっちゃん。

ああっ！ 俺の理性が限界の灯火で風前の寸前でえ！ ウガアアア
ああ嗚呼アア……

~~~~~

どうも〜！ 大河内太佑です。サンタが大変な事になってます。

「ふしゆるるる……ふしゆるるる……」

サンタは必死に堪えてるけどサンちゃんに飛び掛かるのは時間の問題っぽいな。

そんなに制服に飢えてたのかなあ？

それにしても似合ってるなあブレザー。これなら制服フェチじゃなくてもオチそうだよ。正直、僕もちょっとドキツとしちゃったしね。

ガタンッ！

あ、ヤバッ！

サンタがイスから勢い良く立ち上がり、とてもじゃないけど人と思えない顔でサっちゃんに詰め寄ってる。

「く、くーちゃん？」

サンちゃんは様子がおかしいサンタにビクビク。

『な、何？ サンタ君どうしちゃったの？』

高階さんは段ボールを持ってオロオロ。

「ぶ、ブレザー……ブレザーがあ……………」

「サンタ！ 落ち着いて！ って、止まらないいゝっ！」

後ろから抱き付いて止めようとするズルズルと引きずられて全然止まらない。

えーと、えーと、どうしたら……そうだ！

「高階さん！ そのイスでサンタの脳天を一思いにいいっ！」

『い、いいの？』

不安げな雰囲気を出しつつもイスを持って殺る気満々な高階さん。

「ふしゅるる……………」

「く、くーちゃんほんとにどうしたの？ なんか怖いよ」

サンタは止まらない。

「だあっ！ 高階さん早く！」

高階さんはイスを肩に担ぎ『今宵の狐鉄は血に飢えておるわ……天誅！』と書かれた段ボールを自慢げに僕に見せた。

「いいからっ！ サンちゃん襲われちゃうでしょっ！」

『ちえ』

イスが思いつ切りサンタの脳天に叩きつけられた。

「ふしゅるぶんっ！」

「くーちゃん！」

とんでもなく奇怪な声を上げて気絶したサンタに駆け寄るサンちゃん。

「太佑君！ 高階さん！ くーちゃんになんてことを！」

……これは自分が何されそうになってたか分かってないな。

「サンちゃん、サンタは君のブレザー姿があまりに可愛いもんだから理性が吹っ飛んじゃったんだよ。それでさっきサンタがおかしかったのは本能のまま、欲望のままに君を襲わんとしたんだ」

「え、えーと……」

うーん、いまいち理解してないな。

「つまり、サンちゃん可愛くて仕方がないってこと」

それを聞いたサンちゃんはパアツと顔を輝かせて嬉しそうにサンタの頭を膝に乗せる。

いや〜微笑ましいなあ……羨ましいなあ……まあ取りあえず――

「高階さん、会計お願い〜」

『はいはい』

~~~~~

「……………んあ……………」

……………山？

いまいち意識がはつきりとしねえ……………。俺何してたんだっけ？

「あ！　くーちゃん気が付いた？」

「……………サっちゃん？」

サっちゃんの顔が山から覗いて……ああ、胸か……。やっぱり結構デカいな……。ん？　なんかこう柔らかくて、気持ち良いな、なんだ？

段々と意識がはつきりとしてくる。

……………はっ！　膝枕されてるっ！？

「うわっしょーっ！　いつ！」

「ひゃっ！」

慌てて飛び起きるとサっちゃんが驚いて悲鳴を上げた。

「あ、ごめん」

「もう……なかなか起きないから心配したんだよ？」

「心配かけてすまん」

サっちゃんはホッとしてるけどなんか機嫌がいいような……。ま、いいか。

サっちゃんはブレザー姿ではなくいつものサンタクロースルックに戻っていた。

「そういえば太佑と高階さんは？」

「おはよ、サンタ」

『いやあゝ案外とサンタ君も変態だったね』

太佑は苦笑いしてるけど高階さんは失礼極まりねえ。

キグルミ女のアンタに変態と言われる筋合いはねえ！

「取りあえずいろいろと悪かった」

太佑とサっちゃんに謝る。

「あとで『甘味処 米矢山^{こめやさん}』のイカスミ納豆DXスターフルーツ大福パフェ奢ってね」

『私もお願い』

高階さんがなんか言ってるが無視しよう。

「太佑、お前そんなもん食うのかよ……」

あの組み合わせはねえよ……。

「美味しそう……」

サっちゃんもかい……。

『ねえサンタ君、私も迷惑かけられたんだし、私にもイカスミ納豆DXスターフルーツ大福パフェ奢って？』

「あんたが原因だ！ 誰が奢るかっ！」

『ガーン!』

後退り、そう書かれた段ボールを持つてる高階さんの姿はそれはもうシヨックを受けてるようには見えない。

「ったく、じゃあ帰るか」

「うん、じゃあこれ持って」

差し出されたのは大きな袋。中身は洋服。

「気に入った服を入れて貰ったんだ」

「そうか、じゃ次はスーパーに行くぞ」

「うん!」

「サンタ、サンちゃん、じゃあね」

『ありがとう……ごさいました……ううつ、パフェ奢って欲しかった……』

太佑が泣き崩れてる(？)高階さんをなだめながら手を振ってくる。

「おう、じゃな。高階さん、また来るよ」

「高階さん、太佑君、ばいばーい」

俺達はやっと給食屋を後にした。

「ねえ、クーちゃん」

「どうした？」

サっちゃんは悪戯っぽく笑う。

ドキッとしたのも束の間――

「セーラー服とブレザーもちゃんと貰って来たから安心してね♪」

嗚呼……また俺の平穩は遠のいた気がする。頑張れよ、俺の理性……。

ギフト9：妹サンタ

「ただいぼっ！」

色々あった買い物から帰宅し、玄関を開けると突然の腹部の衝撃。

な、なんだ？

サッチちゃんもポカンとしていた何が起こったのか分かって無いみたいだ。

腹を見るとちっこい背中が震えていた。

こいつは……

「とつか橙花……何してんだ……」

橙花はガバツと顔上げるとガシツと俺に抱き付いた。そして、

「うわあああああんっ！ 怖かったよおっつ、お兄ちゃん！」

泣きやがった……。

「まったく、どうしたんだ？」

「あのね、えっぐ、あのね、ひっく」

……全然進歩無しだなこいつは。

心の中で妹の進歩の無さを嘆いてると乱次さんがやってきた。

「あ、ただいま、乱次さん」

「おかえり、それより黒の字、不審な子供が家にいるみてえなんだけど見て……」

「ああああんっ！ 来た……っ、あの人っ！ あのんだよ、お兄ちゃん！」

乱次さんが怖いらしい橙花は俺にしがみついて泣きじゃくる。

……あ、そういえばサっちゃんと乱次さんの事を橙花に言ってなかった。

「あーサっちゃん、乱次さん、取りあえず居間に行こう。話が進まないから」

いまいち事態が飲み込めてないサっちゃんと乱次さんを連れ、しがみつく橙花を引き摺り居間へと向かった。

居間のテーブルに俺と橙花、サっちゃんと乱次さんの組み合わせで向かい合っている。

「……ひっく、ひっく……」

「取りあえず泣きやめ、話ができねえ」

「ひっく……うん……」

「よし、サっちゃん、乱次さん、紹介するよ。妹の橙花だ」

「み、三田橙花です……」

やっぱり橙花は乱次さんを見て怯えてる。まあ、家に帰って来たら着流し姿のヤクザがいたら誰でもビビるか。

「私はサン・Ｔ・アクライド・ローズベルラ。クーちゃんの妻です。よろしく、橙花ちゃん」

「……………つ……………ま……………?」

胸を張って堂々と俺の『妻』とのたまったくれやがった。橙花は完全に石化していた。

「サっちゃん！ 何言ってるんだ、違うだろ！」

「えゝ」

「そうですぜ、お嬢。この場合は『妻』じゃなくて『押し掛け妻』ですよ」

「あっ！ そうだったねゝ」

「そういう問題じゃない！」

はあ……疲れる。

ズドンッ！！　ベキヤッ！！

「なっ……？」

「はえあ？」

「あ？」

見ると橙花が立っていた。どうやらテーブルを叩いたらしい、テーブルを見ると……く、砕けてる……ってあぁっ！　テーブルがっテーブルがあっ！

俺が砕けたテーブルとこれからの家庭の財政に打ちのめされてると橙花が叫んだ。

「ダメだめ駄目ダメだめ……っ！　そんなの認めないったら認めないっ！　こんなコンコンチキのアバズレのコスプレ女がお兄ちゃんの妻だなんて、橙花は認めないんだからっ！！」

「なんだと……お嬢を愚弄するとは良い度胸だ……子供と言えど容赦しねえ……」

あぁっ、このテーブル結構高かったんだよな……しかも、気に入ってたのになぁ……取りあえずは食費を切り詰めて、光熱費押さえて……

「うるさい！　変態ヤクザ！」

ドゴンッ！

「がはっ！」

「乱次さんっ！」

ドサッ

うーん、問題はあるよなあ……少なくとも一週間くらいは四人分の食費はかかるし、久し振りに帰って来た橙花に服買ってやったり、外に食べに連れてってやりてえしなあ……どうすっかな、テーブル買ったならそれも出来なくなるしよ……。

「私を滅茶苦茶に罵った上に乱次さんに酷いことして……くーちゃんの妹といえども許さない！ 妖刀・山葵醤油の錆にしてやる！」

うーん……^{ひより}日由先輩あたりにバイトかなんかないか聞いてみるかなあ……いや、でもあの人のバイトはヤバイの多いしなあ……。

「橙花のお兄ちゃんを『くーちゃん』なんてふざけた名前で呼ばないでー！」

「なんだと！」

ビュッ！ ドカッ！ バキッ！ ベコン！ バカン！ ガッシャ
ーーンッ！ ドスッ！ ズガガガガッ！

それとも奏に頼むか？ でも高校生にバイト頼むのもなあ……どうしたもんか……

ズダン！ グチャツ！ ズガガガガツ！！

「……………はっ！」

ヤバッ、ちょっとトリップしちゃってたな。と思ったのも束の間、サっちゃんと橙花の叫び声が聞こえてきた。

「くーちゃんは私のものだっ！」

ガイン！

「お兄ちゃんは橙花のものなのっ！」

ドカツ！

凄まじい攻防を繰り広げるサっちゃんと橙花。その規模は先日の子っちゃんと蓮香以上だ。

……………いつの間にこんな事になった？ あ、俺がトリップしてる間か……………まあそれはいい。俺がどっちのものを争っているらしい。全然良くないけどこの際はまあ良いだろう。

だが、この有様はなんだ？

床は決裂、ソファは切り裂かれ、テレビは粉々になり、棚は崩れ、

窓は割れ、観葉植物が倒れてる。

ソファは7万……テレビは35万……愛情込めて世話してた観葉植物はプライスレス……

「私の方がくーちゃんを好きだよ！」

ズバァッ!!

「橙花の方がお兄ちゃん好きだもん！」

ドゴンッ!!

サっちゃんが長ドスを振うと辺りの物が切り裂かれ、橙花が拳を振うと辺りの物が砕け散る。

あ、柱が……今度はエアコン!? ……………。

サっちゃんと橙花は取っ組み合いながら今度は俺に尋ねた。

「くーちゃんは！」

「お兄ちゃんは！」

「私（橙花）とこの小娘（このアバズレ女）のどっちが好きなの
!」「」

ハモってすぐに睨み合い、殴り合う。

「誰がアバズレ女だ！」

「橙花は小娘じゃないって言ってるでしょっ！」

また争い始める二人。

ギャーギャー！ スパッドカツ！

ふっ、フッフツ、クツクツクツ、ハハハハ……フハハハハハ、

「アーツハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

突如笑い出した俺に二人は驚いて動きが止まり、俺の顔を見た途端に仲良く抱き合いながら後退りを始めた。

「おやぁ？ 急に仲良しサンだな、二人共……。そんなに見つめてどうした？ オレの顔に何か付いてるか？」

「く、くくくーちゃん、おち、落ち着いて……」

「そ、そそそだよ、そ、それにほら、サンさんと橙花は仲良しこよしだよっ！」

「う、うん！ ほ、ほらっ！」

橙花は引きつった笑いを浮かべてサっちゃんに抱き付く。

「ああ、それは良い事だ。二人が仲良くしてくれて嬉しいよ……」

俺は二人の間に入り肩を組み、二人の頭をガッチリと掴む。

「じゃっ、三人で仲良く『コレ』を見ようか……」

グキッと二人の頭をひねり見る影も無くなってしまった部屋を見せる。

「さっ、これ見て何か言う事はあるかなあ……?」

「え、えーと……てへ?」

二人とも引きつった笑いで『てへ』なんてのたまってくれちゃいましたよ……

「『てへ』じゃないんだよ二人とも。橙花が最初壊したテーブル1万、サっちゃんがり切り刻んだソファが7万、あのテレビは35万、エアコンは8万くらいだったかなあ……あ、そうそうあの棚は結構値切ったんだけどそれでも19万したんだよな。観葉植物も愛情込めて世話してたのにボロボロになっちゃって……あれには値段なんかつけられないくらいだしなあ……」

二人の顔色が面白いように青ざめていく。

「あの柱の修理にはいくら掛かる事やら……」

「う、ううっ、ごめ、ごめんなさい……っ!」

ついには泣き出した橙花。

ま、泣いたからって許さんがな。

「泣いたってダメだ。お前が泣いたところでこの部屋が元に戻るの

か？」

「ひっぐ、えっぐ……でもでも……うわあああああん！」

……ダメだ、全然泣きやまねえ。

「ねえ、くーちゃん」

サっちゃんがいつもと変わらない風に話掛けてきた。

こいつ本当に反省してんのか？

「なんだ？」

「その妹黙らせて、ウザイ。あと寒い」

「ウザイってなんだようっ！」

その言葉に橙花が暴れ出し、それに触発されるようにサっちゃんも暴れ出す。

……あ、これ反省してねえな。

暴れる二人の頭を掴み、橙花の頭をサっちゃんの頭に全力でぶつけた。

ゴッ！

「~~~~~っ!?!」

頭を抱えて痛みにつづくまるサっちゃんと橙花。

「喧嘩両成敗、自業自得だ」

しっかしこれどうするよ……。お気に入りの家具が……。あゝ
なんか泣きたくなってきた……。

被害状況を確認するために部屋を見回すとテーブルの残骸の側に
乱次さんが倒れてた。

「ちよつ、乱次さん、しっかりしてください！」

「うつ……。くつ、黒の字か……」

「大丈夫ですか？ やったのどっちです、橙花ですか？ サっちゃん
ですか？」

「妹さんでさあ、ところで……」

乱次さんが部屋の惨状を見て啞然とした顔になる。

「討ち入りでもあつたんで？」

「サっちゃんと橙花の喧嘩したせいです……」

はあ……。家具が……。

「く、黒の字、どうした？ 随分疲れてるみてえだが……」

あ、そういえば乱次さんが窓を直してたよな……

「乱次さんっ、前に窓を直したみたいにこの部屋直せませんか？」

「……ここまでヒデエとちょっと無理だな」

そ、そんな……。

フツフツと怒りが込み上げてきた。

「乱次さん、上の俺の部屋に行っててください」

「ど、どうした？」

「いいから行ってください」

「お、おう」

乱次さんは何故か顔を引きつらせながら俺の部屋へと向かっていった。

「さて、サっちゃん、橙花……」

俺が言うとうずくまる二人の肩がビクツと震えた。

「いつまでそうしてるつもりだ？ 今すぐここを片付けろ」

二人はブルブル震えてる。

「……言つとくがここが片付くまでお前ら飯抜きだからな」

「「そんなっ！」」

潤んだ瞳で俺を見つめる二人。そんな二人を普段細めてる目を開き、見下ろす。

「文句あるのか？」

「「ありません」」

平身低頭して返事をしたサっちゃんと橙花。

「いいだろう、ちなみに今日の夕飯はお雑煮だ。片付けが終わったら俺の部屋に来いよ。俺と乱次さんがいるから」

「「はい」」

二人の返事に満足した俺は居間を出て2階へ向かった。

親の遺産は使えないし、俺の貯金もそんなに無いし、バイトの一つ二つじゃ厳しいな……。やっぱ高給つてなると曰由先輩に頼むしかないかなあ……。

ドテッ

『ふえーん、膝擦りむいたあ〜』

『そんなの睡でもつけときや治るよっ、どうでもいいからちやっちやと働け！ くーちゃんの手料理が食べらんなくなっちやうだろ！』

『ふーんだ！ それ位年増に言われなくたってわかってるよ！』

『と、年増……っ！ この成長不良貧乳女っ！』

『何よ！ そんなの所詮は脂肪の塊じゃない！』

ドッタンバツタン！

……… やっぱあいつら今日飯抜きだな。

10・職安サント（前書き）

久しぶりの更新です。それではどうぞっ。

10・職安サント

「じゃあ、ちょっと出掛けて来るよ。乱次さん、サっちゃんと橙花がサボらないようお願いしますね」

「おう、黒の字。まかせとけ」

外に出て俺は溜め息を吐いて居間の方をチラリと見る。
まだボロボロで目も当てられない。

「ほんと、なんて事してくれたんだよ……」

昨日は片付けないと飯抜きつつたのに片付けた先から喧嘩して元の木阿弥。

どうしてサっちゃんは仲良く出来ないかなあ……。
それにしても仕事あるかなあ。

「うーん、無いねえ」

「そ、そうですか……」

「ごめんね、黒裕君」

叶井先輩は済まなそうに言う。憐憫の情でも催してるのかその目には涙が……。ってなんで先輩が泣いてるんですか……。

「へ？ あれ？ほんとだ。泣いてる……」

先輩にも予想外だったのか……。

先輩はそうかと手を叩いた。何か分かったらしい。

「多分、僕は女性に苦勞してるのは僕だけじゃない事に感……」

「今日はお手数お掛けしました。それじゃ、また」

「……あ、うん」

先輩、そんな悲しそうな目で俺を見ないで下さい。それに俺は先輩と同類じゃ——俺を振り回すサツちゃんに橙花に蓮香……——あ……ど、同類じゃ無い筈……。そう願いたい。
こうして俺は叶井先輩の元を去った。

「本当にどうすっかなあ……」

まるでリストラされたサラリーマンみたいに公園のベンチで途方に暮れる俺。チビッコ共が俺を指差し母親がそれを窘める。見せ物じゃねえぞ、ど畜生！

打開策を考えてると出来れば会いたくなかった声が聞こえた。

「黒裕？」

顔を上げるとそこにいたのは日由先輩だった。

俺は逃げ出したっ！　しかし、回り込まれて逃げられない！
そんなドラクエチックな事を十五分くらい続けた後俺は諦めた。

「どうして逃げたのかしら、黒裕？」

「条件反射っすよ」

日由先輩の目が据わった。ヤバイ、ヤバイよ俺っ、このままじゃとても口では言えない悲惨な事になるっ！

「ふざけた事を言うのはその口かしら？」

ギリギリと迫り来る日由先輩。
な、なんとかしなければっ！

「せ、せせせ先輩っ！」

「何かしら？」

えーと、えーと、どうする？　このまま仕事頼んでみるか？　しかし、日由先輩に頼んだらどんな仕事が……いや、背に腹は代えられない。溺れる者は何とやら、だ！

「臨時のアルバイトありませんかっ？！」

……言ってしまった。

日由先輩は俺を襲うのをやめて何か考え込んでいる。先輩の様子を見守っていると先輩が俺に質問した。

「黒裕はどの位お金が欲しい？」

「どの位……んーと」

どの位要る？　まずは部屋の修理代だろ？　それから家具が……結構な数が壊れたからな……。

「に、二千万もあれば……」

「二千万……」

また何やら考え込み始める日由先輩。いくら先輩でも二千万は高かったか？　でも家具には金掛けたいんだよなあ……。

不意に先輩は俺を見て笑った。ニヤリと笑った。あの笑いは良くない。先輩があんな風に笑う時は絶対に良くない事が起こるっ！

「黒裕、あなたにとっても良い話があるわよ？」

「……ただい」

「おかえりなさいませっ、サント様っ！！」

「おかえり、くーちゃん」

「お兄ちゃんおかえり」

一度開けた扉を閉める。

なんだ今のは、今、メイドルックのサツちゃんと橙花と蓮香がいたような……いや、気のせいだ、うん。

自分をなんとか納得させて再び扉を開いて――

「サ……」

「く……」

「おに……」

閉めた。

あつれー？　ここは何時から大きいお友達の集う喫茶店になったんだ？　いや、落ち着け、落ち着くんだ俺っ！

「すうゝはぁゝ、よしっ」

よし、落ち着いたぞ。……ん？　そういえばサツちゃんと橙花、片付けはどうなったんだ？

心配になつて庭を覗くと………よし、あいつら私刑だな。

俺は三度扉を開ける。

「サ……ンタ様？」

蓮香はそう呟く事しか出来て無かった。

「く、くーちゃん？」

「お、お兄ちゃん？」

顔が引きつってるサツちゃんと橙花。俺はそんな二人の頭に手を乗せて笑い掛けてやる。

「お前ら、何、してんだ？」

「「お、お出迎え？」」

声を揃えてそう言いくさりやがったサツちゃんと橙花。はっはっはっ、良い度胸だぁ……。

手に力を込める。

「「いたたたたたたたたっ?!」」

「痛い？　そうだろうなあっ、俺の心の痛みはこんなもんじゃねえぞ！ー！」

「あ、あのーサント様？」

蓮香に話掛けられて、俺は手に力を込めたまま蓮香の方を向いた。

「一体どうしたんですの？」

「ああ、気にしなくても大丈夫。俺はこの馬鹿二人をお仕置しないとイケないから俺の部屋の方に行つてて」

「は、はあ……」

少し怯えた表情の蓮香が二階に上がって行くのを見送った後、俺は二人に微笑んだ。

「さ、行くつか」

「い、いやあああああああああつ！ー！」

部屋に戻ると乱次さん、晴寺、海、蓮香、太佑がいた。乱次さんは何故か縄で縛られている。

「……何してんの？」

「やつほ」

「よう」

「お邪魔してるよ」

「黒の字、面目ねえ……」

取りあえず俺は乱次さんを助けて、晴寺を殴った。

「おいっ！　なんで俺は殴られたんだっ？！」

「さて、」

「無視すんなっ！」

俺は華麗に晴寺を無視して話を続けた。

「今日は一体何しに来たんだ？　後、海、お前は後で説教な」
「なんでよっ？！」

あくまで惚けるか……。

「蓮香達にメイド服着せたのお前だろ？」
「何の事かなあ？」

そっぽ向いて口笛吹いて……白々しい。

「ふざけるなよ……」

海は俺を見てニヤリと笑った。

「あ、もしかしてサンタ、メイド服よりブレ……」

「ストップっ！！　分かった、説教はやめるっ。だからそれ以上言
うな……」

「分かればいいのよ。分かれば」

太佑以外はみんなキョトンとしている。
クソッ、これだから幼馴染みって奴は……。

「あれ？ サンタ、サンちゃんと橙花ちゃんは？」

「ああ、あいつらなら今頃泣きながらリビング片付けてるだろうよ。それよりお前ら丁度良い時に来たな」

全員が俺を見た。

「ヨーロッパに行かないか？」

10・職安サンタ（後書き）

いかがでしたか？

次回サンタ達はヨーロッパに行きます。

ギフト11：始まりサンタ（前書き）

はてさて、始まりました『ヨーロッパ編』！笑いあり？ バトルあり？ シリアスあり？の疑問だらけの新章に突入です！

ギフト11：始まりサンタ

今俺達は日由先輩の自家用機の中にいます。飛行機は目的地に向かってドンドン進みます。

ん？　なんで敬語かって？　それはな……

「おい、サンタア……」

「私達を騙したわね……」

「サンタツ、見損なったよっ！」

みんな、っていうか晴寺と海と太佑は俺を囲んで睨み付けてるからだ。なんでこんな事になってるか、事の発端はかれこれ二時間くらい前に遡る。

「ルーマニアとデンマークだったか？」

「ああ」

晴寺の質問に適当に答えて時間を見る。
後一時間か……。

「橙花、トイレは大丈夫か？」

「うんっ、大丈夫だよっ！」

「そうか、そうか」

頭を撫でてやると橙花は嬉しそうに目を細めた。

「サンタ、あんたさあ……」

「ん、どうした海？」

海は苦笑いで俺に言った。

「シスコンの気があるよね」

なんだよ、そんなことかい。

「あー、確かにそうだね」

太佑もそういえばといった感じに海に同意した。

「シスコンって訳じゃないけどこいつは大事だからな」

そう言つて橙花の頭を軽く叩いてると海と太佑が済まなそうに俺に何かを言おうとしていた。

「気にすんなよ。それに、これから旅行に行くんだから辛気臭い顔してんじゃねえよ」

言いながら辺りを見回すとサツちゃんが微動だにせずにベンチに座ってた。

不思議に思い近付いて話し掛ける。

「サツちゃん」

「……………」

呼び掛けても反応しないでブツブツと何かを呟いていた。

「サツちゃん？」

「は……うわぁいつ?!」

もう一度話し掛けると弾ける様にサツちゃんは立ち上がった。

……何やってんだか。

「ボーっとしてどうした？」

「う、ううん。何でも無いよ、何でもないから……」

なんだかあからさまに動揺してるサツちゃん。まるで親の大事な物を壊して、それを隠してバレないか心配してる子供みたいだ。

「そうか？ 別に良いが……。まあ、気が向いたら教えるよ、俺に出来る事なら手伝ってやるから」

俺の言葉にサツちゃんは少しだけ逡巡してからよしっ！ と気合を入れて俺を見た。決意の表情だった。

「く、クーちゃん、あのね、デ、デンマークはダメだよっ！」

「なんでだ？ とうか今変更は無理っていうか、デンマーク行きを拒否したら俺はもう二度と日の目を見れないといつかなんとうか……」

あの人には逆らえないしなあ……。

サツちゃんは俺の言葉に首を捻りながらデンマークに行く事を嫌がった。

「クーちゃん、それでもデンマークはダメだって!」

「どうしたんだよ、サツちゃん。デンマークになんかあるのか？」
「う、うん、じ、実は、その、デンマークに私の、こ、こ、こん…」

サツちゃんの言葉は最後まで聞けなかった。

「お嬢っ、黒の字っ、そろそろ行きやすぜ！」

「サント様っ！ さあ、早く参りましようっ！」

「蓮香お姉ちゃんズルイツ！ 私もっ！！」

乱次さんが俺とサツちゃんを呼び、蓮香と橙花が俺に抱き付いて来た。

というか何故抱き付く？

結局サツちゃんは何を言いたかったのか分からないままに俺達は搭乗口に向かった。

全員が席に着き、飛行機は動き出す。俺以外の誰もが内装の豪華さに興奮していた。

どの位豪華なのかというとエアフォースワンと言うのが一番分かりやすいと思う。

そんな興奮の中、俺はというと素直に興奮出来はしなかった。理由にはまだ本当の事を言っていない事。いや、言えなかった事。もはや、今更言ったところで現状は変わらないという状況なのだ。後はもう運を天に任せるしかない。

それともう一つはサツちゃんだな。明らかに様子がおかしい。や

つばデンマークに何か因縁でもあるのか？
とにかく、そんな俺の心配と皆の夢や希望や欲望なんかを乗せて
超豪華な自家用飛行機は飛び立った。

そんなこんなで雲の上。思いつきりやりたい放題していた。
酒を飲み、肴を食べ散らかし、賭け麻雀に勤しんでいる。

「お前ら……」

そんな様子に呆れていると天井から大きなディスプレイが降りて
来た。

何事かと思うとディスプレイには『CW』の文字が。

ま、まさか……。

皆の方を見るとサツちゃんと乱次さん以外の顔が引きつっていた。
蓮香は引きつるところか顔色が土気色になっていた。

後悔先に立たず……か。

画面が変わりそこに日由先輩が映った。

「ご機嫌は如何かな、私の下僕諸君。あら、蓮ちゃん久し振りね、
元氣してた？ 相変わらずカワイイじゃない」

「ひっ！」

大きく息を呑んだ蓮香はパタリと気絶した。

「あぁっ、蓮香っ！」

「蓮香お姉ちゃんっ?!」

俺と橙花が慌てて気絶した蓮香に駆け寄ろうとした時、

「この、クソ佑があっ!」

「げふあっ!」

晴寺に殴られた。

「おい、サンタ。なんで座留先輩があそこに映ってる? おい、ど
ういう事だっ?! 答えろっ!」

晴寺の叫びに答えたのは俺ではなく、日由先輩だった。

「晴寺二乗くんはるむつじょうくん」

「晴寺晴寺ですっ!」

晴寺が怒鳴っても日由先輩は何処吹く風だ。先輩は晴寺の奥を指
差した。

「どうでもいいけど、後ろ、危ないわよ?」

「へ?」

晴寺が振り向くとそこには妖刀・山葵醤油を手にしたサツちゃん
とボキボキと拳を鳴らす橙花が。

あーなんと言ったらいいのやら……。

「くーちゃんを」

「お兄ちゃんを」

「殴るなあっ!」

「ぎゃああああああっ！！！！」

日由先輩はサツちゃんと橙花にボコられてる晴寺を無視して俺を見た。

「ど、どうも……」

「んっふふ、結構な人数集めたわね。結構よ。さて、君達取りあえず速やかに席に座りなさい」

日由先輩が指をならすと天井から無数の手が……ってキモいつ！！

「キヤアッ！ 何これッ？！」

「うわわっ？！」

「くーちゃん、これ何っ？！」

「いやあーっ、気持ち悪いよおっ、お兄ちゃんっ！」

そうして俺達が強制的に座ったのを確認すると日由先輩は薄笑いを浮かべて俺達を見る。

「さて、君達は何をしにデンマークとルーマニアに行くのか分かってるかな？」

海が俺を睨みながら言った。

「観光……って訳じゃ無さそうですね」

ヤバイ、海がキレかけてる……。はあ、なんで後悔は先に立ってくれねえんだろ？

「その通り。これはアルバイト、交通費、宿泊費、その他向こうでの出費はすべてこっち持ち。好きなだけ滞在していてもいいわ。その代わりこれから私の言う事をする事」

俺は海と太佑の恨みがましい視線に耐えながらずっと気になっていた事を聞いた。

「そ、それで、何をしたらいいんです？」

「君達にやって貰いたい事。それはね、デンマークのリセティア家の弱味を握り私の会社に服従させる事とルーマニアの何処かにいる筈のネキア・ラキリーゼを探し出して日本に連れて来る事。この二つよ。バイト代は全員に言い値で出して上げる。但し、どちらか片方でも失敗したらバイト代は無しよ。詳しい事はラキスト君が到着し次第聞いて頂戴。それじゃあ、私は忙しいから。誰一人死なないで帰って来なさいね」

余りに不吉な言葉を残してディスプレイは暗転した。
暗転した瞬間、不気味に静かな海の声がした。

「サンタ……」

「ど、どうした？」

海は俺を見下ろし、床を指差した。

「そこに正座なさい……。早くっ！」
「は、はいっ！」

床に正座すると太佑と晴寺も恨めしそうに俺の方に近寄って来た。
そして話は冒頭に戻る訳だ。

「一体どういう事なのよっ!!」

うーん、どう弁解したものか……取りあえず、

「騙した事は本当に悪かったっ!」

俺は深々と頭を下げた。チラリと海達の表情を見上げると……だ、ダメだ。まだ怒っていらっしやる……。

「言いたい事はそれだけ?」

えーあー、どうする? どうする、俺っ!

「よ、よく考えてみるよお前ら。先輩はあんな事を言ったが別にバイト自体をするのは俺だけだっていいんだ。お土産だろうが飯だろうがなんだろうが先輩持ちなんだぞ? いくら日由先輩のバイトだからと言って被害を受けるの俺とサツちゃんと橙花だけなんだぞ?」

俺の言葉にサツちゃんと橙花が不満の声を上げた。

「えー、やだ」

「私もなのっ?」

何をふざけた事を吐かしてるんだコイツらは……。

「なんでこんな事になったと思ってやがるっ! お前らが家具と居間を全壊させたからだろうがっ! このくらいのバイトでもない」と飢え死にだ馬鹿野郎っ!!」

案の定サツちゃんと橙花は何も言えなくなった。

まったくあいつらは……。

「がっ！」

「サンちゃんと橙花ちゃん怒るのは良いけどまずはこっちでしょ？」

恐ろしい力で海の方を向かせられそして、

「許してやるから大人しく……」

「「殴られろっ！……」」

「ぎいやあああああああっ！」

「くーちゃんっ！……」

「お兄ちゃんっ！……」

サツちゃんと橙花の声を聞きながら俺の意識はフェードアウトしていった。

ギフト11：始まりサンタ（後書き）

いかがでしたか？ 次回の舞台も機内です。新キャラ登場です！

ギフト12：魔法使いサンタ（前書き）

さあさあ始めました『ヨーロッパ編』第二章。今だ物語は飛行機内。無事、デนมールクに到着出来るのでしょうか？
それでは、どうぞ！

ギフト12：魔法使いサンタ

現在俺達は空の上。海達の怒りも治まり、相談の結果、バイト組が俺、サツちゃん、橙花、乱次さん、蓮香の5人。観光組は晴寺、海、太佑の3人と言う事になった。

なつたは良いが今はやる事が無いので全員でウノに興じていた。

「ふはははっ！ スキップだ！」

「あーっ！ 何するのさ晴寺っ！」

「はい、6ですわ」

「あー、俺ちよつと便所に行って来る」

「ふい〜」

トイレでスッキリして、戻って来ると俺は愕然とした。

「な……っ?!」

床に横たわっている海、晴寺、太佑、蓮香とボロボロになって倒れているサツちゃん、乱次さん、橙花。

なんだよ、これは？ ふざ、けるなよ……何の冗談なんだ、これは……。

「おや？ まだ、いましたか」

「っ?!」

背後からの声に飛び退く。

そこにいたのは男とも女ともつかないフードを被った奴だった。

「お前か？」

目の前にいる奴が誰だろうが関係ない。

「お前がやったのか？」

絶対に許さん。

フードはクスクスと不快に笑う。

「だとしたら、どうします？」

俺とあいつの距離は歩数にして僅か一步半。

「ブチ殺す」

一步で間合いを詰めてフードの懷に潜り込み心臓の辺りに拳を叩きこんだ——はずだった。

「なっ?!」

俺の拳は空を切り、フードの声はまたも俺の背後から響いた。

「速いですね、危ない所でした」

その声はとてもじゃないが危なかったとは思えないものだった。

その声が俺の神経を逆撫でする。
コイツは絶対殺す。

「おっと！」

さっきよりも速く間合いを詰めて右拳を振るう。
避けられ、その勢いで身体が反転。そのまま回し蹴り。

「とっ！」

フードは回し蹴りを避けて大きく飛び退いた。
いつもだったらさっきので確実に仕留める事が出来た筈だった。
普通じゃない。こんなの奏以来だ。

それでも……。

フードは楽しげに言う。

「フフフツ、凄いですね。そのスピードと動き。今度は私も手を出
しましょう」

……不愉快だ。

何なんだあいつは？

不愉快だ。

なんで橙花やサツちゃんがあんな目にあう？

不愉快だ。

俺は橙花を守ると誓ったよな？

不愉快だ。

なのにこの様はなんだ？

不愉快だ。

「不愉快だ」

「おや？」

俺は駆け出しながら転がっていた山葵醤油を拾い投げる。

「おっと」

一気に近付き殴ろうと拳を突き出す。

フードは拳を受け流しそのまま鳩尾みすおちに掌底がめり込む。

「がつ！……ぐうつ！！」

痛みを堪えてフードの腕を取り動きを止める。

拳を顔面に叩き込む。が、手応えが無い。フードの掴まれている左手が俺の顎を狙う。

その左手を顎に到達する前に掴み、顔の側面に蹴りを入れた。

「ぐあっ！」

今度は当たった。確実にダメージを与えられた筈。実際にフードはよろめいた。

フードは少しよろめきながら距離を開けた。

「つつう……。なかなかやりますね。まあ、私は元々体術は苦手です……。合格です。次のステップに移りましょうか」
「なんだと？」

フードは満足そうに続ける。

「今度は私から行きます。しっかりと避けて下さいね」

妙な空気に辺りを包んだ。

なんだこれは？

警戒して身構えるとフードは何かを呟く。

「我、大気の水氣すいきに求め訴える者。

私の求めを聞き届け、私の想いの形を成せ。

私の求めは凍付く劫火、想いの形は貫く氷塊」

なんだ……これ……。

フードが何かを呟いた。途端、冷気が辺りを包み込んだ。

分からない。ここの空調は万全の筈だ。なら、なんで辺りに冷気が漂う？

そして、俺は信じられないモノを見た。

「我に集いて解き放て！」

氷柱が、ここにある筈の無い氷柱が、絶対に異常な場所——フードの周囲に現れた。

な、なんだよ、これ……。まるで《魔法》じゃないかつ？！

「氷の投槍『アイスジャベリン』」

啞然としていた場合じゃなかった。迫り来る氷塊に停止していた俺の思考が戻る。

アレはやバイ。正直、避けられるかどうかは微妙な所だ。速すぎる。でも、あいつをボッコボコにしないと気が済まん！

俺はフードに向かって駆け出す。

襲いかかる氷柱を一つ避け、二つ避け、三つ避け……。すべては避け切れず服も身体もボロボロになっていた。

「はあ、はあ、クソッ……」

「本当に素晴らしいですね」

フードはえらく楽しそうだった。

「一般人がここまでやるとは……流石は社長ですね。敬意を称して止どめを刺してあげましょう 我、大気に求め訴える者。

私の求めを聞き届け、私の想いの形を成せ。

私の求めは大気の衝撃、想いの形は破碎の鉄鎚」

クソッ、殺られてたまるかよっ！！

そうは思っても予想以上に身体が動かない。

「 我に集いて解き放て！ 風の鉄鎚『エアインパクト』」
「がっ?!」

何が……っ?!

何が起こったのか分からなかった。分からないまま俺の意識は遠のいていった。

………

………ん

………ゃん

う……ん……な、なんだ？

……いちゃん

誰かが、遠くで、呼んでる？

…にいちゃんっ

だ……れ、だ？

「お兄ちゃんっー!!」

「んあ？ 橙……花？」

視界が開き、目の前に半泣きの橙花が俺に抱き付いて来た。

「おっ、ちよっ?!!」

何が何やら……。

「くーちゃん!」

「サンタ様っ!」

「おごっ!」

サツちゃんと蓮香も俺に抱き付いて……。
ムニョ。

俺の顔を柔らかくて気持ち良い何かが包み込んだ。

す、スゲエ気持ち良い。気持ち良い……けど、い、息……が……
息が、出来ないっ……!

多分俺の顔が完全に埋もれてる事から考えるに多分サツちゃんだ。

やっぱデカいなあ……。とか思ってる場合じゃねえよっ！

「も、もがもがあゝゝっ！」

「うわあゝん！ お兄ちゃんが無事で良かったよおゝっ！」

橙花が俺の腰辺りでギュッ。

メキミシッと俺の腰骨が悲鳴を上げる。

「もごがあっ！」

「サント様っ！ 心配したんですのよっ！」

今度は蓮香が俺の胸辺りでギュッ。

ミシリッと肋骨が悲鳴を上げる。

「もがごおっ！」

「くーちゃんっ！」

サツちゃんの胸が俺の顔にムニョ。

俺の口と鼻を完全に塞ぐ。

「~~~~~っ?！」

ジタバタと暴れても三人は俺に抱き付き続ける。

ヤバイ、これマジで死ぬ。殺される。

俺の抵抗が弱々しくなってきた頃苦笑してる様な声がした。

「ほらほら、いい加減離れないと死んじゃいますよ？」

「「「え?!」「」「」

3人が慌てて離れた。

「はあ……はあ……はあ……た、助かった。つたく、お前らな……」

そこまで言って気付いた。

俺が気絶する前にサツちゃん達を見た時、確かにサツちゃんや橙花はボロボロで蓮香達は床に倒れていた筈だ。見ると晴寺や海、乱次さんも安心したように俺を見てる。なんだか俺が見たあの光景が嘘みたいだ。

「おい、橙花、サツちゃん。身体は大丈夫なのか？ あんなに傷付いて……」

俺の言葉に誰もが不思議そうな顔をした。なんで全員そんな顔するんだ？

俺の疑問に答えたのは、橙花達に忠告した声で、

「その事について、私が説明しましょう」

俺を襲ったあのフードの声だった。

俺は拳を握り締めて立ち上がる。

「デメエ……」

脚に力を込めて駆け出そうとした時、

「ストップ、サンタ」

海に頭を掴まれた。

「何しやがる、離しやがれ……俺はあいつを殺さねえと気があがが

がががつ！」

こっ、こめかみがあっ、こめかみがあっ！

俺はあのおバカ園児じゃねえぞこのヤローっ！

「いつまで殺気立ってんのよ、馬鹿サンタ。それにあの人は日由先輩が言ってたラキストさんよ。下手な真似してみなさい、あたし達全員どうなるか分からないわよ？」

「……………クソツ。分かったよ、分かったからいい加減グリグリするのを止めやがれっ！」

海が手を離し俺は改めてフードもといラキストを見た。
美しく白っぽいブロンドの髪は肩まであり、端正な顔立ちで背が高く、線が細い。

そんな中に奇妙な場所がある。その外見と相俟ってまるでエルフが本から飛び出して来たのかと錯覚させられる。

ラキストの耳が長く尖っていた。

ラキストは残念そうに笑って言った。

「おや、先に紹介されてしまいましたね。さつき海さんから御紹介に預かりましたラキスト・レイル・セバリエリーエと申します」

ラキストが自己紹介したが俺の意識は全てラキストの耳にだけ向けられていた。

ラキストは俺の視線に気付いて薄く笑って語り出した。

「ああ、やっぱり気になりますか？　そういえば皆さんにもまだ説明してませんでしたね。

本来ならば教えないのですが、愉快的事に貴方方はあのサンタクロースの娘とトナカイと一緒にですし、何より私は黒裕君、君を気に

入りました。

それで、この耳の事ですけど有り体に言っちゃいますと私はエルフです。正確にはハーフエルフですけど」

サツちゃんと乱次さんは、やっぱりかぁとか珍しいな……とかなんとか言っちゃってるが俺も橙花も蓮香も太佑も晴寺も海もどんなりアクションを取ったらいいのか分からずに硬直している。

エルフ？ エルフだと？ 俺はファンタジーとか大好きだ。好きだがそんなファンタジーな存在が目の前にあつて、『はいそうですか』なんて納得出来るわけ無いだろう？！ 大体、あの笑いは全然信用ならねえ。

「おい、エルフだろうがなんだろうがどうでもいい。お前は橙花達に手えだしたろ？」

俺の恨めしい言葉に少しばつの悪そうな表情を浮かべた。

「いえ、橙花さんやローズベルラさん、ここにいるあなた以外の全員何もされていません」

「……………は？」

「私達にしてみればボコられたあんたがラキストさんに連れてこられたって感じよ」

「……………あーっと、どういう事だ？ 確かに俺が見たのはここにいる全員だ。……………えーと、何がどうなってんだ？」

「あのですね、やはり今回一緒に仕事をする相手なのでその实力は知っておきたかったんですよ。ですから、」

ラキストが目を瞑るとまたあの時の様に辺りの空気が変わる。

そしてあの詠唱の様な言葉がラキストの口から紡ぎ出される。

「我、大気の水気、火気に求め訴える者。

私の求めを聞き届け、私の想いの形を成せ。

私の求めは惑いの夢幻、想いの形は騙りの蜃気楼。

我に集いて解き放て。

幻想蜃気楼『ファンタジーミラージュ』」

「っ?!」

言い切った瞬間、天井に”俺達”が立っていた。

一体何が……。

パチンツという音が響いて天井の俺達が消える。

誰も何も言えなかった。

「と、このような幻覚魔法を使つて煽らせてもらいました。黒裕君、君は本当に面白い人ですね。あなたの身边を調べさせて貰ったのですが、社長や『黒白の響鬼 アッシュオーガ』だけではなく、『我儘破壊者 セルフイツシュ』や『天涯 アローン』などとも交友があるみたいですね」

一体コイツは何を言ってるんだ？ アッシュなんたらとかセルフイツシュだとか訳わかんねえ。

この場にいる全員がすっかり我に返つていて退屈そうにしている。ラキストはまだ話し続ける。

「いやはや、一般人でこれだけの怪物達と交友を持つてると言うのは異常とも言えるでしょうね。セルフイツシュなんて近付くのも恐ろしいんですよ？」

ところで、さっきも見たでしょうが私の魔法はどうでした？ 世界には今、魔法使いは八人しかいないんですよ。完全に素質に左右

されますからね。私の魔法はですね、火、水、土、空気の所謂『
フォースエレメンツ
四大元素』に求め訴えるものなんです。特務課の中でも使い勝手が
良い能力と評判なんですよ。お陰で社長に良く褒められるんですよ。
。いいですか皆さん、社長は素晴らしいんです！ 最高なんです
！ 私、社長になら……」

……話がなげえっ！

何なんだコイツは……。なんだかフアンタジーな事言い出したと
思ったら訳分かんねえ事言い出して今度は先輩の素晴らしさって……。

「サンタァ、何なんだよアイツは、訳わかんねえよ」

「そうだな。晴寺二乗、同じ位訳の分からん奴だな」

「海いっつ！ サンタが俺を苛めるうっ！」

海に泣き付く晴寺に呆れていると肩を叩かれた。

「ん？」

振り向くとそこには死にそうな顔の橙花とサツちゃん。

「……ど、どうした？」

「……お腹……減った……」

……あー、そういえば二日前から飯抜きだったっけか。

えーと、確かここは機内食とか無い代わりに台所があった筈だよ
な……。

「太佑と乱次さんと蓮香と海と晴寺も何か食うか？ そろそろお前
らも腹減る頃だと思っただけだ」

「あ、うん。食べる食べる。晴寺の分もちゃんと作ってやってね」
「よろしく」

「黒の字、手伝いやすぜ」

「私も手伝いますわっ!!」

「おう、助かるよ」

台所に行こうとして太佑が俺を呼び止めた。

「サンタ」

「どうした？」

「ラキストさんの分とかはどうするの？」

言われて、ラキストの方を見る。

「……ですね、私が社長と初めて会ったのは去年の七月……」

……まだ喋ってたのかよ。

「別にいらんだろ」

「そ、そうかな？」

不安そうに言う太佑に問題無いと言って台所へ行こうとすると、

「……なんですよ」 あ、私も食べますよ。私の分が無かったらこの飛行機墜落させますから。話を戻しますね、僕は思ったんですよ。この人しかないとい！」

ラキストはムカつくくらいの笑顔で言って誰も聞いて無い話を続ける。

本当に何なんだよコイツは……。

何かもう俺の口からは溜め息しか出なかった。

ギフト12：魔法使いサンタ（後書き）

いかがでしたか？

結局ヨーロッパには到着しませんでしたね。

そんなこんなで今回の後書きは橙花とラキストの紹介を少々。

みたとうか
三田 橙花

中学3年生。見た目は小学5年生。かなりのロリっで、超絶ブラコン少女。将来の夢は黒裕のお嫁さん。

ラキスト・レイル・セバリエリーエ

128歳。ハーフエルフ。一度喋ると止まらない。酷い時は三日程喋り続ける。日由にぞっこんラブ（死語？）。世界に八人しかいない魔法使い『八魔神』の一人。八魔神最強と言われている。

なんだか最近『僕と彼女の』と『サンタの子守歌』の世界がますます節操無しになって来た気がする今日この頃です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4277b/>

3・惨・サンタの子守歌

2010年10月9日01時35分発行